31-502

帝國圖書館藏

昔日本館寄贈本

帝國圖書館

明治四十五年

本書は、斬新なる形式と實質とを有せるものにして、本書以前未だ曾て本書に似たるものあるを見ず、一々實驗啓發の金言にして、旅行者無二の寶鑑也

旅行者寶鑑目次

◎本書の性質と價値……一
◎本書の內容と組織……五
◎旅行の種類に就ての心得……一五
其一　探險の旅行……一五
其二　視察の旅行……三一
其三　研究の旅行……三六
其四　採集の旅行……三七
其五　遊樂の旅行……四〇
其六　信仰の旅行……四七

其七　保養の旅行……四七
其八　取引用の旅行……四九
其九　行商の旅行……五一
其十　遊説の旅行……五四
其十一　談判の旅行……五六
其十二　見舞の旅行……六〇
其十三　招待されて赴く旅行……六一
其十四　任官就職の旅行……六三
其十五　嫁入聟入の旅行……六四
其十六　慶弔の旅行……六九
其十七　危急に赴く旅行……七〇
其十八　困窮して已むを得ず爲す旅行……七三

◎旅人の種類に就ての心得……八一
其一　旅行と男女老幼の別……八一
其二　旅行と政治家……八五
其三　旅行と實業家……八六
其四　旅行と宗教家……八七
其五　旅行と文學者……八七
其六　旅行と美術家……八八
其七　旅行と教育家……八八
其八　旅行と職工勞働者……八九
其九　旅行と無職業者……九一
其十　旅行と俳優其他藝人……九一
其十一　旅行と爵位ある人、地位高き人、一般に……

知られたる人……九三
其十二　旅行と男女學生……九四
其十三　旅行と壯健なる人……九五
其十四　旅行と虛弱なる人……九五
其十五　旅行と剛毅なる人……九六
其十六　旅行に怯懦なる人……九六
其十七　旅行と冷靜なる人……九七
其十八　旅行と多感なる人……九八
其十九　旅行と喜べる時……九八
其二十　旅行と悲める時……九九
其廿一　旅行と得意なる時、失意なる時、不安なる時……一〇〇

◎同伴の種類に就ての心得……一〇一

其一　同伴の自分地位……一〇一
其二　同伴の親疎生熟……一〇一
其三　同伴の貧富美醜……一〇二
其四　同伴の人物品性……一〇四
其五　同伴の性癖嗜好……一〇五
其六　同伴の年齢性別……一〇六

◎旅行の方法に就ての心得……一〇八

其一　日限に依つて里程の日割をなすべき事……一〇八
其二　其日々々の里程を朝晝晩に割る事……一一二
其三　前途の地理に隨つて一日の路程を定むる事……一一四
其四　滊車旅行の心得……一一五
其五　滊船旅行の心得……一一七

其六　電車旅行の心得……一二二
其七　馬車旅行の心得……一二三
其八　自轉車旅行の心得……一二五
其九　自働車旅行の心得……一二八
其十　人力車旅行の心得……一二九
其十一　騎馬旅行の心得……一三二
其十二　滊船以外の船の旅行に於ける心得……一三七
其十三　衣服の選び方及び其着やう……一四七
其十四　携帶品の選び方及び其持やう……一五三
其十五　草鞋の擇び方及び穿き方……一五九
其十六　下駄及び靴の選び方と其穿き方……一六二
其十七　路の歩き方……一六三
其十八　渡船に乘る心得……一七二

其十九　捷徑を行く心得……一七三
其二十　早道の法……一七六
其廿一　草鞋を拔く法……一七八
其廿二　晴れたる日の徒歩旅行法……一八〇
其廿三　雨の日の徒歩旅行法……一八一
其廿四　風の日の旅行法……一八二
其廿五　雪の日の旅行法……一八三
其廿六　途中の休み方……一八五
其廿七　宿屋に着き方、風呂に入り方、食ひ方、立ち出て方……一八七
其廿八　すべて急ぐ時の心得……一九五
其廿九　旅中にて買ひ物の仕方……一九七

◎旅行の土地に就ての心得……二〇一

旅行者實鑑

其一　賑やかなる地を旅行する心得……二〇一
其二　寂しき境を旅行する心得……二〇二
其三　寒國を旅行する心得……二〇五
其四　熱地を旅行する心得……二一四
其五　山の奥を旅行する心得……二二二
其六　山越の旅行の心得……二二五
其七　海濱を旅行する心得……二二八
其八　海上を旅行する心得……二三〇
其九　深林の中を旅行する心得……二三〇
其十　絶壁の上下を旅行する心得……二三三
其十一　大河の岸を旅行する心得……二三四
其十二　湖沼の間を旅行する心得……二三四
其十三　廣野の中を旅行する心得……二三四

目次

其十四　丘陵の上を旅行する心得……二三七
其十五　好景の地を旅行する心得……二三八
其十六　平凡の地を旅行する心得……二四〇
其十七　乾燥の地を旅行する心得……二四一
其十八　卑濕の地を旅行する心得……二四二
其十九　瘴癘の氣のある所を旅行する心得……二四二
其二十　流行病の所を旅行する心得……二四二
其廿一　惡獸毒蟲の出沒する所を旅行する心得……二四五
其廿二　風俗の淳朴なる所を旅行する心得……二四八
其廿三　人情の輕薄なる所を旅行する心得……二五〇
其廿四　氣風の殺伐なる所を旅行する心得……二五二
其廿五　氣風の因循なる所を旅行する心得……二五三
其廿六　親切なる人間の多き所を旅行する心得……二五三

其廿七、奸惡なる人間の多き所を旅行する心得……二五五
其廿八、嚴格なる氣風の所を旅行する心得……二五八
其廿九、淫靡なる氣風の所を旅行する心得……二五九
其三十、他と異りたる特殊の風俗習慣ある所を旅行する心得……二六〇
其卅一、宿屋の好き所、及び其惡しき所を旅行する心得……二六一
其卅二、飲食物の好き所、及び其惡しき所を旅行する心得……二六二

◎旅行の季節に就ての心得……二六三

其一　松の內の旅行……二六五
其二　極寒の旅行（雪中の旅行をも含む）……二六四
其三　梅花の頃の旅行……二六四
其四　桃花の頃の旅行……二六七

其五　櫻花の頃の旅行……二六八
其六　若葉の頃の旅行……二六九
其七　梅雨の旅行……二七〇
其八　炎天の旅行……二七〇
其九　新秋の旅行……二七一
其十　明月の頃の旅行……二七三
其十一　紅葉の時節の旅行……二七四
其十二　風の頃の旅行……二七五
其十三　年末の旅行……二七六

◎旅行の場合に就ての心得……二七七

其一　地方の大祭若しくは祝日に當りたる場合……二七七
其二　蠶業地の養蠶期……二七九

其三　漁業地に於ける或る特殊の漁期……二八〇
其四　田植稻苅の時期……二八一
其五　旱年の旅行……二八二
其六　雨年の旅行……二八三
其七　凶作の場合……二八四
其八　豐作の場合……二八四
其九　地震、洪水、火災、其他種々の變事を經過したる土地を通行する場合……二八五

◎旅中の食物に就ての心得……二八九

其一　旅中の食物を味ひ別くる心得……二八九
其二　食品の精粗好惡を鑑識すべき事……二九二
其三　旨き物を食ふ時の心得……二九五

其四　不味き物を食ふ時の心得……二九七
其五　有害有害なる物を食ひたる時の心得……二九九

◎旅中の宿泊に就ての心得……三〇二

其一　宿屋を選ぶ心得……三〇二
其二　上等の宿屋及び中等下等最下等の宿屋に着きたる時の各別の心得……三〇四
其三　親切なる宿屋に對する心得……三〇九
其四　冷淡なる宿屋に對する心得……三一〇
其五　木賃宿に泊りたる時の心得……三一二
其六　野宿したる時の心得……三一四
其七　百姓家若くは寺院、其他宿屋ならぬ所に宿借りたる時の心得……三一七

其八　山奥に泊りたる時の心得……三一九
其九、崖の上若しくは崖の下の家に泊りたる時の心得……三二〇
其十　野中の一軒家に泊りたる時の心得……三二〇
其十一　海岸に泊りたる時の心得……三二一
其十二、河邊に泊りたる時の心得……三二一
其十三、湖畔に泊りたる時の心得……三二二
其十四、淋しき村に泊りたる時の心得……三二二
其十五、賑やかなる町に泊りたる時の心得……三二二
其十六、宿屋に着いて直ぐに聞くべき事……三二三

◎旅中人と交渉する心得……三二三

其一　道中近附となりたる人に對する心得……三二四
其二　車夫馬士に對する心得……三二六

其三　腰掛茶屋の主及び女中等に對する心得……三二六
其四　宿屋の主、番頭、其他雇男、女中等に對する心得……三二七
其五　按摩、藝人、及び、宿屋に來る商人、貸本屋等に對する心得……三二八
其六　旅中すべて特別の待遇を與へられる時の心得……三三〇
其七　旅中買物を頼み、其他人に手數を掛けたる時の心得……三三一

◎旅中の病氣に就ての心得……三三二

其一　食傷及び水中りに就いての心得……三三二
其二　足痛に就いての心得……三三三
其三　旅中にて怪我したる時の心得……三三六
其四　毒虫に害せられたる時の心得……三三七
其五　流行病に感染したる時の心得……三三七

其六　持病起りたる時の心得……三三八
其七　風邪に罹りたる時の心得……三三九
其八　急發の腦病及び腹痛に就いての心得……三三九
其九　途中にて病起りたる時の心得……三四一
其十　夜中宿屋にて病起りたる時の心得……三四一
其十一　湯氣にあがりたる時の心得……三四二
其十二　旅中携帶の藥劑及び旅中買求むる藥劑に就ての心得……三四三

◎旅中の變事に就ての心得……三四四

其一　途上若しくは腰掛茶屋或は宿屋に於て、俄に地震、洪水、海嘯、噴火、落雷、颶風等の天變地異に遭ひたる場合……三四四

目次

其二　火災に罹りたる地を通過する時の心得……三四九
其三　宿屋にて火災の起るに遭ひたる時の心得……三五一
其四　喧嘩或は果し合ひの傍を通り掛りたる時の心得……三五三
其五　途中にて追剝或は胡麻の灰に逢ひたる時の心得……三五四
其六　宿屋にて泥棒に遭たる時の心得……三五六
其七　狂人亂暴者に遭ひたる時の心得……三五七
其八　喧嘩を吹き掛けられたる時の心得……三五八
其九　何かと見誤まられて難に遭ひたる時の心得……三五九
其十　他人の難に罹れるを見たる時の心得……三五九
其十一　野馬、放れ牛等の驅け來れるに逢ひたる時、惡獸毒蛇、狂犬等に遭ひたる時の心得……三六〇

終

旅行者寶鑑

伊藤銀月著

◎本書の性質と價値

旅行すべき土地の案内書及びこれに近き性質のものにあらず、案内書は極めて多く、而も纏まりたる案内書の外、地方々々にて出來たる詳細なるもの少なからざれば、此上更に出だすの要を見ずと雖も、たゞ旅行を爲すに臨んで必得べき事

旅行しつゝある中に心得べき事

等に就き、すべての問題と網羅して、正確に且つ精細に指示するの書籍は、極めて必要のものなるにも拘はらず、未だ之に關すゝ完全なる著述あるを見ざるは怪しむべし。

蓋し是れ、頗る困難なる事業にして、單に机上の製造のみにて出來得るわざにあらず、平生此問題に關する古今東西の書籍を嚙み碎きて頭の中に貯へつゝあると共に、繁華の地、寂寥の境、深山の中、大海の上、熱砂の原、氷雪の谷、足跡何れの所にも遍くして、普通の旅行の外、頗る贅澤なる貴族的旅行をも、甚だ貧寒なる野宿木賃泊りの旅行をも、盡く皆試みし經驗ある者にあらざれば、此書を作るに堪ふるの資格ある無く、且つ、此資格を充分に

具備したる上、多少讀者に興味を與へ得る文筆の才を有する者にして、始めて成功すべければ也、これに着手する者少なく、縱令着手しても成功に至る者無きは、當然と云ふべし。

概して旅中には失策多く、亦自ら失策と覺らざるも、知らず〳〵の間に、過失多く、危險多く、損耗多きもの也、又、旅行に就いての心得乏しきが爲めに受くるの痛苦と不愉快、之が爲に空しく費すの勞力も、肯て少しとせざる也、而も、是等の弊は、獨り旅行に經驗少なき者の受くる所なるのみならず、相當に經驗を積みて平生旅行家を以て自ら任ずる者と雖も、亦免れざる場合多し、之に關する正確精細なる著書の必要、言を俟たざるにあらずや。

著者は、少年時代より今日に至る迄、旅行を以て唯一の嗜好となし、普通

の旅行をも、贅澤の旅行をも、乞食に近き旅行をも、必要の爲めの旅行をも、娯樂の爲めの旅行をも、盡く充分に試みし經驗あるのみならず、平生好んで古今東西の旅行に關する書を讀み、自著に於ては、未だ純然たる旅行の書多からずと雖も、なほ「予之半面」「五十三次草鞋日記」「木曾山道草鞋日記」等あり、前者は主として旅行に於ける自己を描き、中者後者は、出版書肆の依頼に應じて特に試みたる旅行の記事也、斯る著者に依つて試みられたる本書には相當の價値無きを得ざるを信ず、斯る書籍を作るべく予自ら相當の資格あるを信ず、乞ふ、予を目して徒らに自慢を云ふことを能事となす者となすこと勿れ。

但し本書は日本の内地を標準として言を立つる也。

◎本書の内容と組織

前に述べたる如く、本書は旅行に關する萬般の心得を說くを目的の也、一々實地に就いて、云ふべく行ふべき注意を與ふるもの也。

先づ旅行を各方面より解剖して、之に對する注意を十六門に分ち就き一々細密周到に其心得を說かんとす、十六門は左の如し。

（イ）旅行の種類に就ての心得
（ロ）旅人の種類に就ての心得
（ハ）同伴の種類に就ての心得
（ニ）旅行の方法に就ての心得

（ホ）旅行の土地に就ての心得
（ヘ）旅行の季節に就ての心得
（ト）旅行の場合に就ての心得
（チ）旅中の食物に就ての心得
（リ）旅中の宿泊に就ての心得
（ヌ）旅中人と交渉するの心得
（ル）旅中の病氣に就ての心得
（ヲ）旅中の變事に就ての心得

（イ）は、探險の旅行、視察の旅行、研究の旅行、採集の旅行、遊樂の旅行、信仰の旅行、保養の旅行、取引用の旅行、遊說の旅行、行商の旅行、談判の

爲めの旅行、見舞の爲めの旅行、招待されて赴く旅行、任官就職の旅行、嫁入聟入の旅行、慶弔の旅行、危急に赴く旅行、困窮して已むを得ず爲す旅行等、旅行する理由と其目的とを標準として、各異なる心得方を說く也。

（ロ）は、男女老幼の別を始めとして、政治家、實業家、宗教家、文學者、美術家、教育家、職工、勞働者、無職業者、俳優其他藝人、爵位ある人無き人、地位高き人低き人、世間一般に知られたる有名なる人、男女學生等、旅行をなす人の地位、資格、職業等に基ける各別の心得、及び、壯健なる人、虛弱なる人、剛毅なる人、怯懦なる人、冷靜なる人、多感なる人等、各別の體質性格に依つての心得、其他、喜べる時、悲しめる時、得意なる時、失意なる時、安樂なる時、不安なる時等、旅人の境遇と心情の狀態、

別の心得を、一々精細に説く也。

（八）は、同伴者の爲めに、旅行中に於て不幸を生じ、災難に逢ひ、不愉快を感じ、痛苦を受け、若しくは、幸福を生じ、災難を免れ、愉快を感じ、痛苦を去ることあるが故に、同伴者の人物、其性癖、嗜好等に就て、此方の心得置くべき個條多く、其他同伴者の男女老少に應じ、其地位職業に隨ひ、それ〳〵之に對する心得あれば、一々項目を分ちて説く也。

（二）は、豫め定まりたる日限に依りて里程の日割をなす事、其日々〳〵の里程を朝晝晩に割る事、途中に山ありや川ありやを豫知して、其日々〳〵の里程を伸縮し、之に隨つて旅行の方法を講ずる事等に就ての心得、滊車、滊船、電車、馬車、自轉車、人力車、乘馬、駄馬、帆船、曳船、棹にて漕ぐ船、櫓

にて漕ぐ船、其他すべて旅行の爲めに設けられたる機關に依る時の心得、衣服携帶品の選び方、其着やう持ちやう、草鞋の擇び方、草鞋の穿さ方、若しくは、下駄及び靴の擇び方、其穿さ方、足の運び方、出始めの歩さ方、草臥たる時の歩さ方、平地の歩さ方、山坂の歩さ方、泥中の歩さ方、砂の上の歩さ方、眞直なる路の歩さ方、曲折多き路の歩さ方、朝の歩さ方、晝の歩さ方、晩の歩さ方、夜の歩さ方、早道の法、草臥を拔法、捷徑を行く心得、晴雨風雪の別に隨つての旅行法、途中の休み方、宿屋に着さ方、風呂に入り方、食ひ方、寢方、起方、立ち出て方、すべて急ぐ時の心得、途中にて買物の仕方、其他一般の旅行法を説く也。

（ホ）は、寒國、熱地、賑やかなる地、寂しき境、山の奥、山の上、海の浮

とり、海の上、深林の裡、絶壁の上、絶壁の下、大河の岸、湖沼の間、廣野の中、丘陵の上、好景の地、平凡の地、乾燥の所、卑濕の所、瘴癘の氣のある所、流行病の所、惡獸毒虫等の出沒する所、風俗の淳朴なる所、人情の輕薄なる所、氣風の殺伐なる所、其因循なる所、親切なる人間の多き所、奸惡なる人間の多き所、嚴格なる所、淫靡なる所、他と異りたる特殊の風俗習慣のある所、宿屋の好き所、其惡しき所、飲食物の好き所、其惡しき所、其他旅行する土地の異なるに隨つてそれ〳〵心得べき事をば、一々項を分ちて說く也。

（一）は、旅行の季節の異るに隨つて、其準備及び實地跋涉の心得の、各異なる點を說く也、松の内の旅行、極寒の旅行、雪中の旅行、梅花の頃の旅行

桃花の頃の旅行、櫻花の頃の旅行、若葉の頃の旅行、梅雨の旅行、炎天の旅行、新秋の旅行、明月の頃の旅行、紅葉の時期の旅行、風の頃の旅行等、これは大體の區別に過ぎざれども、唯だ其例として示す也、實地には、更に細かに項を分ちて、一々其心得方を解說すべし。

（ト）は、其旅行する時恰も、目的地若しくは通過する土地の大祭其他祝日に當りたる場合、蠶業地の養蠶期、漁業地に於ける或る特殊の漁期、田植、稻苅、其他毎年定まりたる或る一期に遭遇したる場合、旱年、雨年、凶作、豐作等、天然人事共に常に異りたる場合、地震、洪水、火災、其他種々の變事を經過したる土地を通行する場合等、すべて其場合に遭遇したる事柄に對する、各種各別の心得方を細說する也。

（チ）は、地方々々に於ての特産たる食品、及び其特殊の料理法に對しては勿論、縱令同一の食品同一の料理法にても、地方に依つて幾分かづゝ味ひを異にするを、舌にて識り別け、これより、其人情風俗趣味氣質の特點を見出すべき心得、及び、自衛上よりしたる原料の精粗好惡の鑑定、旨き物を食ふ時、まづき物を食ふ時、有毒なる物を食ひたる時、有害なる物を食ひたる時の心得方の各別、其他種々なる旅中の食物の注意と其食ひ方とに就き、叮嚀に心得を說く也。

（リ）は、宿屋の選び方、上等及び中等下等の宿屋、其他最下等の宿屋に着きたる時の各種の心得、親切なる宿屋に對する心得、冷淡なる宿屋に對する心得、木賃宿に泊りたる時の心得、野宿したる時の心得、百姓家若しくは寺

院、山番の小屋、繫ぎたる舟、其他宿屋ならぬ所に宿を借りたる時の心得、山奧、野中、海邊、河岸、湖畔、林中、崖の上下、淋しき村、賑やかなる町等に於ける、種々の宿屋に就いて、各〻異る心得、其他すべて旅中の宿泊に就いての心得を網羅する也。

（ヌ）は、道連れ、合宿、若しくは腰掛茶屋等にて近附となりたる人に對する心得、宿屋の主人、番頭、女中、及び、腰掛茶屋飲食店のそれ等に對する心得、車夫馬士に對する心得、按摩、藝人及び宿屋に來る商人、貸本屋等に對する心得、これらの者が求むる所ありて特別の待遇をなすに對する心得、商店若しくは個人より物を買ふ時、人に事を賴まれたる時、及び、人に買ひ物を賴む時、人に事を賴む時等の心得、名所舊跡の案內者、寺院堂塔及び其

實物觀覽の際、先導且つ説明をなす者に對する心得等、其他すべて、旅中に於て人と交渉する時の心得を説く也。

（ル）は、風土病、食物及び水のあたり、足痛、怪俄、流行病の感染、持病の起り、暑氣あたり、風引き、急發の腦病或は腹痛等、すべての旅行の病氣に就ての心得及び其手當法、途上に病起りたる時の心得、夜中に病起りたる時の心得、旅中携帶の藥劑及び旅中買求めたる藥劑に就ての心得等、一々項を分ちて細説する也。

（ヲ）は、途上若しくは腰掛茶屋或は宿屋に於て、俄に地震、洪水、海嘯、崖崩れ、噴火、落雷、其他の天變地異に遭遇したる時、火災に罹りつゝある地を通りたる時、宿屋にて火災の起るに遭ひたる時、喧嘩若しくは果し合ひ

の傍を通りかゝりたる時、宿屋にて隣室或は他の室に喧嘩の起りたる時、途中にて追剝或は胡麻の灰に遭ひたる時、宿屋にて泥棒に遭ひたる時、狂人亂暴者に遭ひたる時、喧嘩を吹き掛けられたる時、何かと見誤まられて難に逢ひたる時、其他すべて他人の難に罹れるを見たる時等、旅中の變事に就ての心得を説く也。

◎旅行の種類に就て心得

其一　探險の旅行

單に探險のみが目的の旅行に於ては、其心得方を説くに先だちて、第一此種の旅行をなすに適せる人と適せざる人とを區別するが問題也。

(一)身體强健にして寒暑飢渴に堪へ得る。

(二)剛膽にして、如何なる變事難事に遭遇するも、驚かず恐れざる。

(三)沈着にして忍耐力に富み、倦まず撓まず初志を貫き得る。

此三資格を具備せざる者は、斷じて探險の旅行を企つべからず、又、此三資格を具備せざる者をば探險の旅行に伴ふべからず、徒に感情激しくして、熱し易く冷め易き者が、何かの刺戟に依りて好奇心を起し功名心を燃やし、人目を聳動するの目的を以て、困難多く危險多き探險の旅行を企つる如きは、甚だ以て不可也、獨り其目的を達し得べからざるのみならず、之が爲に後悔臍を嚙むの痛苦を受け、或は身を損じ、甚だしきに至つては死を招くこと無しと云ふべからず、是れ世間に例の多き事也、深く心すべし。

扨て、以上の三資格を備へたる者を以つて、探險の旅行をなすに適せる人物となすと雖も、これのみを以て直ちに事に當り得べきにあらず、是れ以上、探險の旅行に要する智識を養ひ技能を磨かざるべからざる也、探險にも種類多けれど、其重なるもの〻一通りを擧ぐれば

(一)山頂の探險　尖頂を究むる事、噴火口、火口丘、火口湖、外輪山等を踏査する事、其他種々あり。

(二)水源の探險　大河の源たる湖或は池を探險する事、水源に遡りて深山幽谷に入り、森林を穿ち、瀑布急湍を凌ぎ、源泉こゝに盡くる所を究むる事。

(三)深谷の探險　嘗て人の其奥を究めたる無き、若くは數十年に一度

つゝ稀に人の至ることある深谷、僵樹、蔓草、落葉、淤泥等に路を埋められ、或は全く路無きの所、瘴毒の氣の籠もる所、惡獸毒虫の潜む所を探險する事。

(四)洞窟の探險　嘗つて人の內を明かにしたること無き、若くは稀に人の至ることある、山中或は谷底の洞穴、及び舟にて入るべき海岸の巖窟、種々なる迷信を藏する所、奇怪なる傳說を鎖す所、惡瓦斯を釀す所、毒水を流す所、鑛氣を含む所を、探り試むる事。

(五)鑛脈の探險　金銀銅鐵の諸鑛脈、石炭、鹽、其他種々の礦物藥物を產出すべき見込ある山嶽を踏査する事。

(六)海島の探險　絕海の無人島、噴火する島、新に發見されたる島、

新に海底より噴き出したる島、住民あり部落ありて特殊の生活をなす島等、種々あるべし。

(七)森林の探險　水源の探險、深谷の探險は、多くの場合に於て森林の探險を兼ぬと雖も、こゝに所謂森林の探險は、單に森林を目的とするものを意味し、間口廣く奥行深く、數山數谷を連ねたる大樹老木の叢也。

等なるが、是等の探險旅行をなすに就き、主として要する智識は

(一)地理學
(二)地質學
(三)氣象學

(二)帽子　探險の旅行に適せる帽子は、烏打の外に無し、他の帽子は、時として旅行を妨ぐることあるべし。

(三)脚絆　これは、紺木綿に淺黄の裏着さたるコハゼ掛けのを好しとす、其他はすべて宜しからず。

(四)足袋　厚く固く、シックリと足に合ひたる刺足袋を取るべし。

(五)草鞋　已むを得ずんば藁製のにても宜しけれど、成るべくは、麻にて作り、柔かく打ちたるものを求むべし、草鞋を作りて賣る者に誂ふべし。

など也。

扨て携帶品はと云へば、探險の旅行に於ては、案内兼隨從の者一人乃至二

三人を雇ふが普通なれば、自己の携帶品と從者の携帶品とを區別するを要す。

先づ自己の携帶品としては

(一)鞄　柔かき革紐を肩より袈裟掛けにして腰に下ぐべきものなれば、其人の體力に依りて加減あるべしと雖も、先づ大きからず小さからぬを好しとす、質は丈夫にして輕く、就中其口の簡單にして開閉に便に、且つ頻繁に開閉しても破損の憂無きを選ぶべし。

(二)鞄の中の品々

(1)手帳(紙質薄く堅く枚數の多きもの)

(2)鉛筆(普通のと色鉛筆とを取混ぜて數本)

(3)半紙(楮製のもの二三帖)

(四)物理學
(五)化學
(六)動物學
(七)植物學
(八)醫學
(九)藥物學
(十)數學

等也、なほ之に要する技能を擧ぐれば

(一)以上の諸智識を實地に應用する縱橫自在の活才。
(二)身體輕捷にして、崖を攀ぢ澗を渡ること平地の如くなる。

(三)器用にして手先利き、小舍を掛け、天幕を張り、食物を作り、臨機應變の跋涉具を造るに巧みなる。
(四)銃に巧みなる、或は擊劍に達し、柔術に熟せる。

等を最となす。

旅裝は、輕便にして進退の自由を妨げざるを尙ぶと雖も、探險の旅行は他の旅行と異りて、單に輕便のみを主とすること能はず、外套、衣服、肌股引、脚絆、足袋、手袋、帽子、草鞋等、すべて丈夫にして且つ輕さを要する中にも注意すべきは

(一)衣服　必ず洋服なるべく、下半は半ヅボンなるべし、和服は場合に依りて云ふべからざる不都合を生ずるもの也。

(二)帽子　探險の旅行に適せる帽子は、鳥打の外に無し、他の帽子は、時として旅行を妨ぐることあるべし。

(三)脚絆　これは、紺木綿に淺黄の裏着さたるコハゼ掛けのを好しとす、其他はすべて宜しからず。

(四)足袋　厚く固く、シックリと足に合ひたる刺足袋を取るべし。

(五)草鞋　巳むを得ずんば藁製のにても宜しけれど、成るべくは、麻にて作り、柔かく打ちたるものを求むべし、草鞋を作りて賣る者に跳ふべし。

など也。

扨て携帶品はと云へば、探險の旅行に於ては、案内兼隨從の者一人乃至二

三人を雇ふが普通なれば、自己の携帶品と從者の携帶品とを區別するを要す。

先づ自己の携帶品としては

(一)鞄　柔かき革紐を肩より袈裟掛けにして腰に下ぐべきものなれば、其人の體力に依りて加減あるべしと雖も、先づ大きからず小さからぬを好しとす、質は丈夫にして輕く、就中其口の簡單にして開閉に便に、且つ頻繁に開閉しても破損の憂無きを選ぶべし。

(二)鞄の中の品々

(1)手帳(紙質薄く堅く枚數の多きもの)

(2)鉛筆(普通のと色鉛筆とを取混ぜて數本)

(3)半紙(楮製のもの二三帖)

(4) 小刀（大小二挺）
(5) 驗温器
(6) 晴雨計
(7) 藥品及び醫療具（胃腸を損じたる場合に備ふる重那、硝蒼、格末の合劑、アンチピリンなどの解熱藥、ブランデー、赤酒等の興奮劑、寶丹其他の氣附藥、石炭酸膏、寶丹膏等の傷藥、水當りを防ぐキナエン、繃帶、綿撒絲、消毒綿、ピンセット等）
(8) 手拭（豫備に二筋ばかり）
(9) 石鹸（藥用を好しとす）
(10) 齒磨楊枝、齒磨粉

(11) 爪楊枝
(12) 鋏（成るべく小形）
(13) 櫛（アルミニユーム製最も好し）
(14) 縫針縫絲
(15) 耐風燐寸
(16) 應急の食品（深山幽谷其他人里遠き所にて、從者に携帶せしめし食品盡きたる時、不測の變にて從者に携帶せしめし食品を失ひたる時、若しくは從者を見失ひたる時の用意に、ビスケット、ビーフエリー、コンデンスミルク、蕎麥粉、鰯、鰹節、角砂糖、醤油エツキス、精製食鹽等、或は此中二三を選ぶも好し）

(17)愛讀書一二冊

(18)正確詳密なる地圖

右の外、其人々に依り、其旅行の性質と方面とに依り、特に必要なる携帶品あるべし。

(三)吸筒

(四)双眼鏡

(五)短銃

(六)ハンカチーフ

(七)ステッキ　成るべくは、反の無き木劒を好しとす、左なくば櫻の握り太なるを取るべし。

(八)毛布

細く捲いて、鞄とぶッちがひに西行背負にすべし。

(九)麻繩　一方に丈夫なる鈎の着きたるを好しとす、谷を渉り崖を攀づる場合甚だ必要なることあり、且つ、動植物、礦物其他採集し得たる珍物を、歸路に荷造りする用となるべし、之を携帶するには、毛布の兩端を脇腹に合せたるに括り着くべし。

(十)穿換の草鞋　二足以上一括りにしたるものは從者に携帶せしむべしと雖も、探險の旅行に於ては、其外必ず一足を身に着け置くべし。

等なるが、從者に携帶せしむべき物品に至つては、其旅行の性質と方面とに

依りて、頗る大仕掛になることもあれど、先づ大抵は

(一)輕便なる天幕

(二)摶飯或は麵包

(三)米、麥粉、其他食物の原料

(四)アルミニユーム鍋其他輕便なる炊事用具

(五)アルミニユーム若くは木製の食器　堅くして輕さを取る

(六)腐敗の憂ひ無く、而も輕くして且つ層張らぬ副食物原料

(七)發火器　耐風燐寸、油製焚附等

(八)瀘水器

(九)毛布數枚

(十)麻細二三筋

(十一)草鞋數足

(十二)提灯及び西洋蠟燭

(十三)寫眞機械

(十四)鉈、斧、鋸、鶴嘴　すべて小形にして輕き物

(十五)風呂敷及び油紙二三枚

等にて事足るべし、强健にして跋渉に馴れたる男ならば、一人にて是程の荷物を背負ふこと左迄難かるまじけれど、大事を取つて二人に分擔せしむるを好しとす、但し、一人以上を雇ひ得ざる場合には、出來得る限り量の輕き品々を選ぶと共に、同種類にて一個以上を携帶する物を一個づゝに減ずべき

也。

なほ、從者を雇ひ得ずして、同等の同行者のみならば、從者に携帶せしむべき品々を、出來得るだけ節減して、各自分擔するの外無し、更に、己れ一個の外、同行者も從者も無き時は如何と云ふに、自己の携帶品の外、萬已むを得ざる必要物のみを取り、これを一括りとなして背に負ふの外無し。

扨て、以上は純然たる探險の旅行をなすに就ての心得なるが、遊樂若くは種々の用向の旅行のついてに試むる探險ならば、左程大仕掛の準備をなす必要ある場合少かるべく、且つ、大仕掛の準備をなし得ざる場合多かるべければ、此章の初より述べ來りたる所を參酌して、然るべく取捨し、宜しきに隨ふべし。

惣じて、探險の旅行は、各種の旅行中最も困難にして、準備を要すること大なるものなれば、此旅行の事に通ずること充分ならば、隨つて自ら他の各種の旅行の神髓を會得すべき也。

其二　視察の旅行

視察の旅行にも種類多しと雖も、概ねこれを別ちて左の十二種となすべし

(一)民情風俗の視察
(二)地理と住民との關係の視察
(三)特殊の天然作用と住民の生活との關係の視察
(四)凶作地、風害地、水害地の視察（農作物と住民との關係を主とするもの）

(五)地震、海嘯、噴火、山崩れ、火災、洪水等の被害視察(異變と人命財産との關係を主とするもの)

(六)鑛山、炭坑、漁場、其他地方の大工場に於ける、雇人虐待、同盟罷工、暴動等の現狀及び結果視察

(七)一町村乃至數町村と、他の一町村乃至數町村との葛藤の視察

(八)地方政治の視察

(九)地方實業の視察

(十)地方學事の視察

(十一)地方人の狀況視察(地方紳士、地方商人、地方勞働者、地方婦人、地方青年等の狀況)

(十二)地方特殊の出來事、他と異りたる常例の祭典祝日等の狀況視察

以上は普通一般の人として、事に應じ、場合に臨み、其必要の點を視察すべき諸題目也、なほ(一)(二)(三)(八)(十)(十二)等は純乎たる、學者として視察するの必要あるべく、殊に(五)の中、地震、海嘯、噴火、山崩れなどは、單に自然的作用としての方面に於て、最も學者の視察に價する也、されど、學者として是等の視察に於ける心得は、門外漢の注意を與ふるを俟つべきにあらず、たゞ、普通一般の人として、職掌上、任務上、個人としての必要上、若しくは社會の爲に貢献するの意より、爾らざれば甚深なる興味より、或は何かの研究の材料に供すべく、視察の旅行をなす者に於ては、必ず左記の各條を心得ざるべからざる也。

(一)視察に要する智識の豫備　平生諸般の學術的及び實地的智識を蓄へ置きて、視察すべき對象に隨ひ、自在に之を應用し得るやうにするは、此上無き事なれども、已むを得ずんば、或る視察の旅行を試みんとするに臨んで、必要なる智識を速成的に吸收すべし。

(二)視察に要する器具の取扱　視察は主として頭と眼とに依るものなりと雖も、特殊の對象を半ば學者的に視察すべき場合には、專門の器具を用意し、且つ其取扱ひ方を心得ざるべからず。

(三)着眼點を定むべき事　先づ、事件若くは現象の中心を索め出してこゝに着眼點を定むべし、爾らざれば全體の眞相を明かにし得べからず、是れ最も重要事也、同時に、若し着眼點を誤らば、視察の効

果は無價値ならん。

(四)兩面より視察すべき事　世には、淺薄にして眼前の現象に眩惑せられ、之が爲に事物の視察を誤る者少からず、如何なる場合に於ても、直接に眼に觸るゝ表面の事の外に、成るべく眼を逃れんとする裏面の事あるを忘るべからざる也、而して、視察の要は、裏面を視ること猶ほ表面に於けるが如く、兩面の對照より事物の眞相を發見するに在り。

(五)五人の言を聞くべき事　五人とは、人の數を意味するにあらず、葛藤、暴動、其他相對的事件の視察に於ては、善にても理にても、一方の言を比較的多く聞くは、堅く禁物也、必ず、公平なる態度を

以て、双方の云分を同量に聞取るを要す、而も、双方の云分のみにては事足らず、更に三種の局外者の言を參考に供せざるべからず、三種とは、双方の各一に同情する兩者と、いづれにも同情せざる中立者と也、斯くて相對の二者と局外の三者とを合すれば五也故に、之を目して假に五人と呼ぶ、五人の言を對照取捨して、其間より事物の眞相を發見するを要する也。

其他視察の旅行に就ての細かき心得は一々記さず。

其三　研究の旅行

研究の旅行は大體視察の旅行と相似たり、たゞ、視察の旅行は視察の結果を實際の用に供すべき目的を有するに對して、研究の旅行は單に研究の爲に

研究する也、此心得を以て、其準備と實地に臨んでの態度とに手加減あるべし。

其四　探集の旅行

これは、探險の旅行と相近き性質を有するものにして、其異る所は、必ず有形の目的物を把握せざれば結果を成さゞるに在り、故に、心得の大體に於ては、探險の旅行の條に述べたる所を讀みて、其中適宜に取捨するを要す、但し、探集の旅行は、探險の旅行の如く必ずしも多くの場合に於て困難危險を犯さゞるべからざるにあらず、時として極めて容易にして了ることある也。

こゝにては、唯だ探集の旅行に要する器具を擧ぐるに止めん、事に當つて

の巧拙は、各人の技能と其熟否とに在るのみ。

先づ、昆虫採集には

(一)捕蟲網

(二)毒壜

(三)ピンセット

(四)ピン

(五)携帶箱

(六)壜或は玻璃管(虫類を生の儘持歸る用)

次に、植物採集の用具は

(一)篋

(二)鎚

(三)鏝

(四)紐

(五)鋏

(六)小刀

(七)ピンセット

(八)顯微鏡或は虫眼鏡

(九)繪具、用紙

(十)採集胴亂

(十一)吸濕紙

（十二）野冊
（十三）網
（十四）水壜

以上の外、何れの採集にも手帳と鉛筆との必要あり、其他金石の採集には、鶴嘴（普通に小形のを取る）、石鑿、鎚等を要すべく、なほ進んで、人跡を絶したる危險の境、陰暗濕毒の地などに、特殊の動植物若くは金石藥物類を採集するに至つては、探險冒險の旅行と區別し難き也。

其五　遊樂の旅行

遊樂の旅行！これが抑も本當の旅行也、他の旅行は皆旅行以外の目的あり、旅行は其手段として爲すものに過ぎずと雖も、遊樂の旅行のみは、唯だ旅行

の爲に旅行する也、遊樂の爲に旅行する也、旅行を以て遊樂となす也、旅行の本義こゝに在り、旅行の能事これに盡くる也。

他の目的無く、他に用件無くして、單に旅行の爲になすの旅行は、實に愉快なるもの也、これ以上の遊び無く、これ以上の樂み無き也、隨つて此旅行は、如何なる性格の人にても、如何なる種類の人にても、容易に試むるを得べく、或る特殊の技能あり、或る特殊の素養あり、或る特殊の智識ある上、或る特殊の準備をなすの必要ある等、そんな面倒なる事に重きを置かねばならぬやうにては、眞の遊樂の旅行にあらず、一切構はず、どうでもいゝとする所に、遊樂の旅行の眞味はある也、遊樂の旅行にも亦種々面倒なる心得を說き、繁雜なる準備を論ずる如きは、迂濶也、野暮也、分らず屋也。

されど、其一切構はずどうでもいゝとする事を土臺として、其上に多少の心得あるを知らざるべからず、どうてもいゝと云ふ土臺たる趣旨を全うすべき心得也。

（一）旅行の方面及び其方法は、漠然と大體を定め置くに止むべし　遊樂を目的とするものなれば、意の赴くが儘にするを好しとす、京坂地方なら京坂地方、伊勢大和なら伊勢大和、相摸伊豆なら相摸伊豆と、單に大體の方向を定め、どう云ふ順序に廻らなければならぬとか、必ず何所々々を見物しなければならぬとか云ふ事には毫も拘泥せざるべし、同時に、必ず歩行にてやり通すべしとか、必ず汽車馬車人車等の旅行機關に依るべしとか、必ず如何なる宿屋に泊るべし

とか、豫め一定せざるが可也、尤も、旅費と日限との都合に依つて、多少是等の點に注意を要することはあるべし。

（二）旅裝は成るべく平日の裝ひに近きを好しとす　ことゝ〳〵しく旅裝を整へ、嚴重に武裝をなし、これが爲めに窮屈を感じ、且つ、これが爲めに心神を勞するが如きは、遊樂の旅行の本旨に違へり、平日の寛ぎたるいてたちに、些かの變化を與ふるだけに止むべし、一張羅の晴着を引掛けて、それを汚すまいと心を配るなど、殊に宜しからず、若し日數を要する旅行ならば、途中旅行の方法の變化するに隨つて、旅裝に要する物品を買ひ求むるが好からん、たとへば、二日間汽車に乘り、それより人力車にて一日行き、其翌る日よりは愈

〳〵草鞋を穿かねばならぬと云ふ時には、人力車にて行きたる日の泊りに於て、脚絆其他の要具を買ひ調ふるなど也。

(三)携帶品は成るべく少なきを尙ぶ　遊樂の旅行は、携帶品皆無なるを上乘とす、手拭、蝙蝠傘、旅行案内等は此問題外なれど、其他は、途中若くは泊りにて、現に必要に迫りたる物品だけを買ひ調ふるが好し、石鹼、齒磨等は宿屋のを使ふべく、石鹼、齒磨も無き宿屋に泊らば、糠と鹽とを用ひて事足るべし、出來得る限り土地〳〵の物を用ふるが遊樂の旅行の本旨也。

(四)土地〳〵の物を味ひ食ふべし　遊樂の旅行に食物を携帶するなどは馬鹿の骨頂也、至る所の土地〳〵の食物を味ひ食ふが旅行の眞趣

也、まづい物はまづい物として土地の趣味を知るべし、鹹い物を食はする所、甘い物を食はする所、それ〳〵土地の人の嗜好より其人情風俗を窺ふに足る也、東京風の料理を食はせるとて嬉しがり、大坂流の馳走をすると喜ぶ奴は、氣の毒乍ら旅行の趣味の門外漢のみ。

(五)優遇冷遇共に可なりとすべし　至る所、良き宿屋に泊りて優遇を受けんとのみ希ふべからず、時として、惡しき宿屋に泊りて冷遇を受くるも、旅行の興味の一ならざるべからず、他の必要の爲めになすの旅行ならば兎に角、單に遊樂の爲めのみならば、必ず此惡しき宿屋と冷遇との趣味をも求めざるべからず。

（六）失策も亦遊樂の旅行の一興味　旅中には失策あり易くして、其失策より痛苦を招き不幸に陷ることあれば、要件を有する旅行に於ては、萬事愼重の態度を取つて、失策無からんことを期せざるべからずと雖も、遊樂の旅行はそんな事に拘泥すべきものにあらず、勿論故らに失策を求むるは宜しからざれど、失策も亦旅中の興趣として味ふの度量無かるべからざる也。

金錢にも期日にも制限無く、興來つて出て、興盡きて歸るを、旅行の極致となし、遊樂の旅行の遊樂の旅行たる所以となすと雖も、比較的少額の金錢を以て、比較的日數多き旅行を支ふるも、亦遊樂の旅行の一種なりとす、こは、蕗の薹の苦きを賞し、蕃の椒辛きを好むが如く、旅中の辛苦を味うて以

て樂となす也。

其六　信仰の旅行

信仰の旅行とは、成田參り、大山參り、伊勢參り、金刀比羅參りと云ふやうに、信仰の爲めに、神社佛閣靈地靈場を志し、旅行を試むるを意味するものにして、要するに、遊樂の旅行の部類に過ぎざる也、其外形こそ比較的謹嚴なるものなれ、內容に至つては、單に遊樂の爲めになす旅行と殆んど異る所無し、唯だ、純然たる遊樂の旅行に比して、いさゝか或る形式を履むの要あるだけ、旅行の準備と旅中の心得とにも亦多少の加減あるべきのみ。

其七　保養の旅行

これは、腦病の人、肺病の人、脚氣の人、其他病後衰弱の人が、健康を回

復せんが爲めに試むるの旅行也、遊樂の旅行と相似たる點も多けれど、遊樂の旅行が單に旅行の爲めに旅行をなすに對して、此旅行には旅行以上の目的あり、旅行は其手段として爲す、純然たる遊樂の旅行と異る點こゝに在る也、故に、保養の旅行には遊樂の旅行と異る心得方あり。

(一)成るべく里程の短きを取り、旅行機關の完備したる方面に向ふべし

(二)好奇心に驅らるゝこと無く、自己の身體に適したる風土氣候の地を選び、之に安んずべし。

(三)郵便電信の便利よき地を選ぶべし。

(四)山中海岸共に、運動散策に勞苦を感せず、空氣緩和に、晝夜陰晴に應じて寒暖計の昇降甚しからざる地を取るべし。

(五)溫泉は、殊に身體に適したるを選ばさるべからず。

(六)旅中は決して事を好まず、悠々自適一切無頓着の態度を取りて、神を養ひ氣を蓄ふべし。

(七)日常必要の器具物品は、途中にて買ひ求むること無きやう、一切準備して鞄に收むべし。

其他は遊樂の旅行の部に說きたる所を參酌すべし。

其八　取引用の旅行

取引用の旅行は、全く遊樂の旅行と區別するを要す、獨り遊樂の旅行と區別すべきのみならず、他の何れの類の旅行とも混淆せざらんことを要す、旅行の趣味など、一切そんな事を眼中に置かざるが、取引用の旅行に於ける心

得の基礎也。

（一）取引用の旅行には、印形、帳簿、電報頼信紙、郵便切手、證券印紙、半紙、卷紙、封筒等の必要品、又商品の販路を擴張せんが爲めの旅行ならば、商品見本、產出製造賣捌の統計表等を携帶すべく、必要品の外は一切荷物に加へざるを好しとす。

（二）取引用の旅行は、用件の爲に行き、用件の爲めに留まり、用件の爲めに歸り、縱令、用件の解決を待つの間、時日に餘裕ありとも、敢て他事を挾まざるを好とす、其間に遊樂的旅行を試むるが如きは殊に宜しからず、又、用件案外に早く方附きたりとて、歸路を遊樂の旅行に變ずべからず。

（三）旅費雜用の外、決して金錢を携帶すべからず、先方へ渡すべき金、先方より受取りたる金、すべて爲替にて處理すべし、貨物商品も亦見本の外すべて送達の機關に托すべし。

以上の三件は、苟くも取引用にて旅行をなす程の人が、百も承知二百も合點の上の筈なれど、中には、心得過ぎて却つて疎かにする者無きにあらず、これを疎かにして、手筈の相違を來し、災害を招き、不幸に陷りたる者の例少からざる也、心せよ。

其九　行商の旅行

勿論遊樂の旅行とは同じからず、どちらかと云へば先づ取引用の旅行に近けれど、取引用の旅行に於ける心得を以て此旅行をなさば、第一苦しくてた

まらぬなるべし。

行商の旅行は、賣藥類、呉服類、書籍類、化粧品類、小間物類、其他種々の商品を携帶して、或る一定の地方若くは全國各地を巡回し、顧客を求めて之を賣捌かんことを要するものにして、これに二種あり。

甲種　一身或は一家の生計を支ふるの職業としてなす行商

乙種　これを以て旅費を作り旅行を長く繼續するの手段としてなす行商

甲種は全然事務的ならざるを得ざるが如しと雖も、なほ取引用の旅行の如く、用件の外は何物をも眼中に置くべからずと云ふにあらず、行商は半ば遊樂の如くになして始めて其勞苦に打勝ち得べく、且つ、遊樂の如くに心得て面白く可笑しくなすにあらずば、充分に行商の目的を達し得べからざる也、

一數ヶ月以上數ヶ月に連なる旅行に於て、殊に其爾るを要する也。

況んや乙種に至つては、純遊樂の旅行と共に其費用を作るべき行商は勿論、他の探險、視察、研究等の旅行をなしつゝ傍ら其費用を作るの行商と雖も、亦甲種に比して更に多く遊樂的性質を有せり、事務と遊樂とを巧に調和して、破綻を生じ缺損を來さしめざらんこと肝要也。

行商の旅行に於て心得べき事は、

（一）方面及び商品の選擇　行商の旅行には、方面及び商品の種類を選擇すること最も必要也、甲種に於ては、其商品の性質に應じて、相當の販路あるべき方面を選び、乙種に於ては、旅行の方面に應じて、それに向きたる商品を選ぶべし。

(二)商品の處置　始めより携帶して出づる商品と、途中にて仕入れ元より送らしむる商品とあり、何れも其取扱ひと賣渡しとの間に、無汰の手數を省き、品質を損傷せざるやう注意すべし。

(三)收支を明かにして豫算と大差無からしむべし　これは獨り行商の旅行に於てのみ必要なるにあらずと雖も、特に行商の旅行に於て其必要多からざるべからず、恐らくは、行商の旅行程收支の計算の面倒なるは無かるべし、收支の都度々々一寸の猶豫も無く帳簿に記入し、其日々々の締括りは、縱令如何なる事ありとも翌朝に延ばすべからず。

其十　遊說の旅行

遊說の旅行に二種あり、一は、足地を踏まず、至る所有志者の歡迎を受け、第一等の旅館に泊り、料理屋の物を食ひ、藝妓の酌を受くる贅澤の旅行、他の一は、笠を頂き草鞋を穿き、山を攀ぢ水を涉り、風雨寒暑を犯しつゝ、たゞ自己の熱心と辯舌とに依つて人を動かさんことを試むるもの也。

兩者共に、各地の人情風俗を知るべき必要ある點に於て、研究の旅行、視察の旅行と相似たり、加之、後者はやゝ探險の旅行の氣味を帶べり、宜しく參酌すべし。

但し、兩者共通の心得方は大略左の如し。

(一)土地々々に於ける人情風俗の差違に注意し、之に應じて遊說の仕方を加減すべし、何所迄も一本槍なるは失敗の本也。

(二)遊說の旅行中は、言語動作を愼み、別して品行に注意すべし、縱令如何なる誘惑に逢ふとも、又、不品行を働かざれば却つて土地の人の感情を害すべき場合に於ても、斷然袖を拂ふを可とす。

其他管々しく注意する迄も無く、遊說する程の者には其心得あるべし、若し心得無き者ならば、本書を通讀して可也。

其十一　談判の旅行

これは先方に一つの目的ありて、たゞそれの爲めにのみ旅行するもの也。

談判の旅行は、兎に角重大事ならざるべからず、郵便の往復にても、電報の連發にても、到底埒明かざるが故に、已むを得ずして自ら赴き、若しくは自己を代表して問題を解決するに足る者を遣はすなれば、並大抵の事にあら

ずと知るべし、而も、旅行の里程の長きに隨つて、事件の重大の度の加はるを認むべし、何となれば、百里二百里乃至三百里の長途を凌いても、必ず談判に行かねばならぬとは、よく〳〵の事なるべければ也。

談判の旅行を別ちて、大畧六種となす。

(一)自己の要件にて赴く

(二)人の代理として赴く

(三)交渉數回の末に赴く

(四)突然事を起して赴く

(五)先方の人と相識りたる

(六)先方の人と相識らざる

而して、此中最も困難なるは、他人の代理として、始めて至るの地に、未だ識らざるの人を訪ふ事也、これに向つて、突然事を起し、寝耳に水の談判を試み、以て直ちに効果あらしむるに、容易の業にあらず、況んや、前に數回の交渉を經て、妙に事件のコヂれたる上を引受くるに於てをや。

されば、談判の旅行に於て須要なる心得を擧げん。

(一)途中にて身體及び精神を勞せざるやう、出來得るだけ安靜なる旅行をなし、食物睡眠等を充分に取り、先方に到着して直ちに餓を感じ眠を欲する等の事無からしむべし。

(二)談判に要する證據書類、委任狀、其他用紙、證劵印紙、印形等は、手落無く之を携ふべし、縱令、用紙、印紙、印形等の必要無き場合

に於ても、談判進行の模樣に依りては、中途より其必要生ずるやも知らざれば、必ず之を用意するを忘るべからず、時に臨んで急に買ひ調ふるが如きはまづし。

(三)事件の性質、內容、其歷史等は、精細に之を暗記し、且つ其備忘錄を携へ、尤も其急所々々を呑込みて、敵の作戰計畫を破るべき總ての方法を胸中に貯へ置くべし。

(四)迅速に結着せしむべし、一席の談判にて要領を得るやうにすべし、氣を拔き息を繼ぐは談判の法にあらず、殊に、長途の旅行を控へたる談判に於ては、巧遲よりも拙速を尙ぶこと肝要也。

(五)談判解決したる場合には、必ず後日に物を言ふ證據を取るべし、口

證は三文の價値も無し、案外に話が分つて、極めて圓滑に解決し、目出度局を結びたる時に於ては、後日に物を言ふ證據などを取るべき必要無きが如くに思はれ、且つ、強ゐて之を取るは氣の毒なるもの也、されど、これにて失策となりたる例少なからず、心すべし。

其十二　見舞の旅行

遠隔の地に居る人の病氣若くは災難を見舞はんが爲めの旅行也、これに就ての心得左の如し。

(一)成るべく、自己の外、自己と同じ地及び附近に在る、先方の親戚知己の多くを代表すべし

(二)自己の見舞品は、間に合せの申譯にあらずして、成るべく念の入り

たるを選び、他より托せられたる品と共に、大事に携帶すべし。

(三)往きには、途中にて自己の遊樂を取るべからず。

(四)見舞の人は先方と同化せざるべからず、己れ得意の境遇に在りとて得意の色を示すべからざるは勿論、失意の境遇に在りとて漫りに失意の色を現はし、先方をして益々意氣銷沈せしむべからず、得意滿々の人が、旅行に依りて一段神氣を興奮せしめ、意氣揚々快談縱横、見舞に行きたるか自慢に行きたるか、差別の着かざる如き、最も不都合也、而も世には斯る分らず屋多し。

其十三　招待されて赴く旅行

招待されて赴く旅行にも種類あり。

(一)講演等の爲め地方の有志者に招待されて赴く旅行
(二)或る大會に招待されて赴く旅行
(三)自己を景慕する者に招待されて赴く旅行
(四)遠隔の地に住む親戚故舊友人知己に招待されて赴く旅行
(五)文士畫人が勝景の地に住む者に招待されて赴く旅行

等は其普通なるものにて、其他なほあるべし、而も、此旅行に就ての心得は、遊説の旅行及び見舞の旅行の部に述べたる所を參酌して、宜しきに隨ふべし、されど唯招待されて赴く旅行に缺くべからざる心得を述べん。

扨は二個條あり。

(一)必ず、興味に富める話題を、一つ以上成るべく多く携へ行くべき事

(二)途中は、豫定の時間と費用とにて支へ得る範圍に於て、出來得る限り旅行の趣味を掬め、話の種を多くすべき事

これ也。

其十四　任官就職の旅行

任官就職の旅行は、旅行其物に特別の心得を要せず、たゞ任官地就職地に到着してよりの心得の爲に、豫め注意すべき個條を擧ぐるに止めん。

(一)任官就職の爲に赴くべき地方の人情風俗に就て、出來得るだけ取調ぶること

(二)己れの任ずべき官、己れの就くべき職と、其地方との關係の現狀及び其歷史を取調ぶること

其他執務を助くべき、及び生活の趣味を保つべき器具書籍等を携へ行くことなど、注意する迄も無かるべし。

其十五　嫁入聟入の旅行

これは、一地方より他の地方へ、一の都府より他の都府へ、嫁に貰はれ聟に貰はれて赴く男女の旅行を意味する也。

此旅行には、注意すべき事甚だ多く、寧ろ他の各種の旅行に於て注意すべき事柄のすべてを一括して、其中より適宜に取捨するを好しとするが如くなりと雖も、念の爲め特に之を個條書きにすれば、大略左の如くなるべし。

(一)先方の家風を豫知する事　各家それ〳〵に歴史あり、歴史に隨つて一種の不文律を成す、これを家風と云ふ、故に、其家古ければ古

き程家風むづかしきもの也、如何に、性質善良なる嫁聟にても、此家風を心得ぬ爲め、若しくは心得ること淺きが爲め、風波を起すこと無きにあらず、豫め種々の方法に依つて充分に之を豫知し、之に處するの呼吸を呑込むを要す、但し、媒人の語るところだけにては、如何に精しくとも充分ならずと知るべし。

(二)先方の土地の氣風を豫知する事　先方の家風を知るのみにては、未だ充分と云ひ得べからず、併せて土地の氣風を知りて、之に應ずるの加減を呑込まざれば、あたり近所の排斥と冷評との爲めに、居たゝまらぬ場合を生ずべし、これも、出發前より心得置くを要す。

(三)先方の家族全部を豫知する事　父は如何なる人、母は如何なる人、

祖父母あらばそれも如何なる人、夫たる者若くは妻たる者は如何なる人、小舅姑は幾人ありて、一々如何なる人、其他長く居る寄食人、飼殺しの奉公人等の、性格及び其家に於ける地位勢力の程度、潜勢力の如何などに就き、種々の方面より取調ぶべし。

(四)先方の親戚知己の關係を豫知する事　これ亦重大事にして、先方の目上には如何なる親戚及び知己ありて、時々機嫌伺ひに出ねばならぬか、又、先方の目下には如何なる親戚及び知己ありて頻繁に出入するか等を知り、我が適くべき家に對する是等の人の勢力の程度を比較し、それ〳〵待遇の加減あるべし。

勿論、豫知したる事を金科玉條と心得、先入主となりて、萬事を

これより割り出すは宜しからず、これと實地とを對照したる後に、自己の取るべき態度を定むべき也。

(五)荷物携帶品に就て心得べき事　時と場合にも依り、身分にも依ると雖も、別送りの荷物及び携帶品は、外形の裝飾に拘泥せずして、堅牢に耐久性あるを尚ぶべし、運送の途中に破損などありては、殊に見苦しく興冷むるもの也。

(六)嫁入聟入の旅行前に心得べき事　旅行前には、成るべく心身を安靜にして、殊に睡眠を充分に取るべし、婚禮の爲めに旅行する者は、多く、別宴に招かれ、祝意を表する者に訪はれ、其他何呉れと準備に忙はしく、身も心も之が爲めに疲れ果て、且つ、それ等の爲めに時

間を費して、夜は遲く迄起き、朝は早くより人に起され、自然睡眠不足となり勝のものなれば、深く此點に注意せざるべからず、兎に角、先方に着いての當座は、出發前より更に多く心身を勞し、更に多く睡眠不足に陷るを例とするものなれば、出發前にて之に堪ふるの準備をなし置くこと肝要也。

(七)旅中に注意すべき事　旅行は成るべく、心身を安靜にし得る方法を選び、安全にして動搖少き機關を選ぶべし、殊に、旅中耳目に觸るゝ物に對しては、冷淡に構へて感情を動かさぬやうに注意すべし、舟と人力車、汽船と汽車ならば、人力車を取り、汽車を取るべきこと、云ふ迄も無し。

其十六　慶弔の旅行

これは、遠隔の地に在る家の慶事を祝ひ、若くは其凶事を弔ふ爲めの旅行なれば、前に述べたる各種の旅行の心得を參考とするの外、左の條々の注意を要する也。

(一)慶事に赴くに失意の色あるべからず、失意の境遇に在る者は成るべく其任に當るを避くべしとなす。

(二)凶事に赴くに得意の色あるべからず、得意の境遇に在る者は、臨時自己を忘れて不幸の家及び人と同化すべし。

(三)旅中は注意して、風土、水、食物等に中らぬやうにすべし、蒼然たる顏色をなし、跟蹌たる風姿を以つて、慶事の家に入るは妙ならず、

また、此の如きていたらくにて凶事の家に入りては、益々其家を陰氣ならしめ、其家人をして不幸の感を深からしむべし。

其十七　危急に赴く旅行

遠隔の地に在る家人、親戚、知己等の急病若くは危難に瀕するを聞き、時を移さず旅行する必要ある場合には、重要なる心得あり。

（一）危急に赴く旅行に就て平生心得置くべき事　何時國際の談判破裂して暗潮を現潮に變ぜしむるか分らざれば、常に何時にても命令の下り次第出發するの用意と覺悟と無かるべからず、是れ軍人の心得也、此心得は何人も社會に處して持つべきもの也、己れの職掌と家政上の事とは、常に整頓して、何時にても代理者に任せ得るやう

になし置くべし、代理者たるべき人は、家族の中若くは近親の中然るべき者を、豫め定めて心得させ置くの要あり、但し、其要點を占めて手裡に握り置くべきこと勿論也、尚ほ、旅費其他先方へ携へ行くべき金錢物品に對する用意は、財産ある者に於ては別に注意を與ふる迄も無しと雖も、財産無き者、生活に餘裕無き者は、平生心掛けて、萬一の場合に講ずべき金策の道を開き置き、而も平生これを利用せんことを思ふべからず、これは單に旅行の爲めの用意のみにあらざる也。

（二）危急に赴く旅行と金錢物品　先方の危急を救ふべき藥品、物件、書類等は、決して脱漏無きやうに調へ、堅牢なる容器に入れて、大

切に携帶すべし、又、出來得べくんば、旅費の如きは、普通に要すべき額の倍、若くは普通に要する額に其半額を加へたるだけを携帶し、其外、旅中或は先方に到着してよりの不時の必要の爲めに、相當の金錢を用意すべし、旅中は時として意外の障害を生ずることあれど、急を要する旅行に於ては、どうあつてもこれを凌がざるべからず、斯る場合、金の力の外に便るべき物無し。

(三)迅速にして安全なる旅行をなすべき事　危急に赴くの旅行は、出來得る限り迅速ならざるべからず、されど、迅速なるべき必要の爲めには、何物をも犧牲に供すべしと云ふにあらず、否、何物をも犧牲に供すべしと雖も、唯一つ供し得ざるは、危險を冒す事也、急が

ば廻れと云ふ諺の如く、迅速ならんことを要するを以て危險を冒すを敢てする勿れ、安全なる範圍内に於て、出來得る限り急ぐを可とす。

右の三個條は、共に極めて大切なる事也、決して其一二を取つて他を疎かにすること勿れ。

其十八　困窮して已むを得ず爲す旅行

肯て旅行を好むにあらず、又、旅行するの必要あるにあらず、唯だ、困窮の餘り現在の居所に安んずること能はずして、若くは、他の土地に於ける職業を目當にして、他の土地に在る人を目當てにして、心細く、覺束無く、寒素なる旅行をなすの餘儀無き場合あり。

これを旅人の側より見れば

(一)單獨にして無錢なる場合

(二)單獨にして少額の所持金ある場合、

(三)家族打揃ひ、若くは仲間の者ありて無錢なる場合

(四)家族打揃ひ、若くは仲間の者ありて少額の所持金ある場合

等にして、これを旅行の性質より見れば

(一)失敗して前後を顧みず出奔する場合

(二)先方に職業の目當ありて、それを便り行く場合

(三)先方に便るべき人ありて、それを目當に行く場合

(四)職業の目當も便るべき人の目當も外れ、進退維谷まりたる場合

(五)始めより無目的無期限に乞食的旅行をなす場合

等也、依て、これらを總括して、重要なる心得を述ることゝせん。

(一)困窮の旅行に金錢を得る法　困窮して已むを得ず爲すの旅行には先づ旅行しつゝ金錢を得るの法を講ぜざるべからず。

(1)書畫を作り、歌謠を唄ひ、其他習ひ覺えたる、若しくは器用にて自然に眞似得たる遊藝を以て、行く〳〵錢を貰ふ事。

(2)あぶりだし辻占を賣り、占ひをなし、流行唄の小冊子、其他、趣味若しくは敎訓、或は實用に屬する小冊子を觸れ賣りし、廉價にして輕便なる實用品を戸毎に敲きて賣り、其些少の利益を以て、寒素なる旅行の費用を支ふる事。

(3)土地々々の博徒、俠客、富豪、慈善家等を敲き、事情を訴へて助力を乞ふ事。

(4)六部、千個寺、其他の回國修行者となり、經を誦し、鉦を鳴らし、太皷をたゝく等の事を爲して、人家に米錢を求むる事。

扨て、これを爲すには、愉快なる色と、活潑なる氣と、さまりを惡るがらぬ度胸と、失望せずに幾度も試むる忍耐力とを要する也、これさへ具はらば、如何に困窮にても、長途の旅行を仕了せるに苦まざるべし。

(二)困窮の旅行に職業を得る法　途中にて簡易なる職業を得、數日間働いて餓を凌ぎ、且つ些少の金錢を得ては再び前途に向ふべき方法

を講ずる也。

(1)道路修繕、新道開鑿、其他土方人足の工事場に飛び込んで、臨時に使つて貰ふべし

(2)養蠶地、茶業地、漁業地等を通過して、其當業期に遭遇せば、どの家にても、どの小屋にても、遠慮無く飛び込んで使つて貰ふべし。

(3)鑛山の附近を通りかゝらば、坑夫の飯場に入つて使つて貰ふべし

(4)大なる船着場にさしかゝらば、波戸場に出てゝ、碇泊船と開係したる勞働を求むべし、貨物若くは石炭の積卸しに雇はるゝを得ん

(5)坂路、泥濘、若しくは往來の頻繁なる所にさゝかゝらば、立止ま

りて荷車の後押をなし、些少の金錢を得べし。

(6)半日程乃至一日程の甲乙兩地に就き、物價を聞き合はせて對照し、若し著るしき差違を見出さば、一方の地の商店に就き、何品幾個を幾何の金錢にて引受けずやとの交渉をなし、幸ひに約束することを得ば、其品が著るしく廉價なる他の一方の地に赴きて、更に出來得るだけ減價せしめ、現品と其店員とを同道して、約束の商店に至り、受授を了せしめ、其口錢を取るべし。

惣じて、これらの事を爲すには、愛嬌を含みて而も快活に、言葉少く其意義明かにして、咄嗟に問題を解決するを要する也。

(三)困窮の旅行と病氣　困窮の旅行には病ひが何よりの禁物也、左無

きだに乞食的旅行を爲し、若くは最下等の勞働をなしつゝ、纔に餓を凌いで、まだるき旅行を續け居る間に、病に犯されては大變也、容易く癒るべき病も生命を取る程の重症となり、左無くとも、病の爲に勞働すること能はざるを以て、餓死に陷るの外無かるべし。

故に、途中に於て金錢を得るの法を講じつゝまだるき旅行を爲す場合に於ては、一旦病に罹らば直ちに身の終りとなるべきを深く顧み、氣を以て病に當るの覺悟こそ肝要なれ。

(四)少額の金錢にて長途の旅行を支ふる法　困窮して已むを得ず爲す旅行に於ては、成るべく少額の金錢を以て、成るべく長途を支ふるの策を講ぜざるべからざる也、さればとて野宿の仕直ゝ出來ず、

食物を減らして狼の如く痩せて歩くも能にあらず、旅費少なければ少ないだけにて適當の方法ある也。

(1)木賃宿に泊るべし。

(2)自分にて米を買ひ飯を炊き、晩と朝との食料に供したる餘りを、梅干入の握飯となし、燒きて盡の料に携ふべし。

(3)草鞋は、往來に脱ぎ棄てたるものより、比較的滿足に近き片々づゝを拾ひて穿くべし。

(4)途中何か買ひ食ひをなす時は、成るべく、切餅、燒芋、炒豆等、腹應へのある物を選ぶべし、但し、これ等に限らず、旅中の食物は一々叮嚀に嚙むべし、左すれば大抵食中り無きもの也。

其他旅中經費を節儉する方法少なからずと雖も、他の門に於て詳說すべし。

◎旅人の種類に就ての心得

其一　旅行と男女老幼の別

旅行の種類の異なるに隨つて、之に對する心得方も亦それ〳〵異ならざるを得ざるは、既に詳細解說せしが、更に、旅人其者の種類の異なるに隨つて各別に注意すべきことを述ぶるに當り、先づ男女老幼の別を問題とするより始むべし。

(一)旅中に於ける男子の心得

一口に云へば、濶達にして洒落なるべし、男子は旅中に於て小事に拘泥すべからず、又、むづかしげなる

顔して固苦しく構へ込むべからず、海の如く廣き心と、魚の跳るが如く快活にして滑稽趣味を帶べる氣とを以て、旅中を安全に且つ面白く過ごすべし、さればとて、予が云ふ所を以つて、旅中をヅボラにせよ、無責任にせよ、旅の耻は掻き棄て的所行を敢てせよとの意味に解釋するは誤り也、或ひは、無暗に大盡風を吹かして、旅中に金錢を撒き散らすことを、予が謂ふ所の男子の心得となし、彌治喜多の如く洒落のめすことを以て、予が、快活にして滑稽趣味を帶ぶと云ひしそれに恰當すとなす者あらば、亦は更に大なる誤り也。

(二)旅中に於ける女子の心得

女子の一人旅の如きは、よく〳〵已むを得ざる場合にのみ許すべきものにして、決して自ら好むべからず、

隨つて、旅中に於ける女子の心得は、すべて同行の男子を楯にして其蔭に立ち、己れ直接に事に當らざるを好しとす、況して、ハイカラがつて出しやばることなどは大の禁物也、今の婦人には、宿屋に談判したり、車夫をやり込めたり、名所舊跡の由來を、警官が人民を取調ぶる時の如き態度を以て訊問したりすることを、旅中に於ける誇りとなし、宿屋の座敷食物などを、無暗に顔をしかめてケナすことを以て、自己の體面を保つ所以と爲す者少なからず、苦々しき事也。

(三)旅中に於ける老人の心得

老人は世故に熟したる者なれば、身體強健なる以上は、一人にて旅行するも差支へなけれど、如何なる場

合に於ても自己の高齢者たることを忘れず、第一冗談にも慾張りたること、猥褻がましたることを口にすべからず、萬事穏かに且つ拔目無く、年寄らしくし、人にも年寄らしき態度を認めしむべし、年寄らしくないと云ふ事は、旅中に於て人に憎まれ侮らるゝ種也。

（四）旅中に於ける少年の心得

今は少年相誘うて避暑避寒の旅行を試むる事の流行する時代也、是等の者及び大人に伴はれて旅行する少年の心得方あり、少年のみの時ならば、出發前精しく大人の敎へを受けて、萬事それに背かず行動すべく、又大人に伴はれたる時ならば、一より十迄盡く其指揮命令を奉じ、決して我意の振舞あるべからず、少年は、旅行の物珍らしさに氣を取られて、知らず〳〵危

險を冒し、或は物を食ひ過ぎ、且つ、旅行と時間との關係に注意すること淺くして、失策を生じ易きものなれば、よく〳〵此三點に注意すべき也。

其二　旅行と政治家

政治家として遊説若しくは視察の爲めに旅行する場合は勿論、單に個人として、私用或は遊樂の爲めに旅行する時に於ても、政治家には政治家の心得無かるべからず、至る所に國民の聲を味ひ聞き且つ地方政治の狀況を視察するを怠らざらんことを要す、而して、旅行より歸り來らば、必ず是等の結果に就て土産話あるべき也、旅中此心得を疎かにする者は眞の政治家にあらざる也。

其三　旅行と實業家

實業家の旅行にも、他と異りたる心得あり、業務用の旅行にても、業務以外の用向の爲めに旅行する時に於ても、遊樂の旅行を爲す場合にも、すべて實業家としての本分を忘るべからざる也、珍しき土地に至り、新しき人に逢ふ度毎に、自己の業務とそれ等の地と人との關係を觀察研究して、若し得る所あらば、直ちに之を事實に結果せしむるか、或は之を綜合して後日の大なる結果を待つべし、なほ、如何なる場合に於ても己れの實業家たるを省み、旅行の途中に於ても、宿屋に着いても、常に實業家らしくすべし、味噌の味噌臭きは、良き味噌にあらずと雖も、實業家のみは何所迄も實業家臭きが好し、旅中金錢の出納は、吝ならずして密なるべし。

其四　旅行と宗教家

如何なる種類の旅行を爲すとも、躬行を以て自己の宗教を輝かすべきは云ふ迄も無く、機會さへあらば、門外の者に向つて自己の宗教を宣傳すべき也、車塵馬埃の間、客舍の燈前、渡舟の數分間、皆我が道を傳へ教を宣ぶる場なりとすべく、其土地々々の著るしき天然物及び人造物、或は口碑傳說、若しくは新に土地の問題となりたる出來事、皆取つて即座に說教の材料となすに足る、而も、取つて置きの巧妙なる比喩よりは、此切實にして斬新なる材料の優れること萬々也。

其五　旅行と文學者

文學者の旅行は詰まりどうでもいゝやうなものゝ、旅行と自己の天職との

關係を明かにすることは、如何なる場合に於ても必要也、詰まり、文學者は旅行の價値を讀書と同じ重さに見るべし、旅行は文學者に取りて最も大事也極めて直面目なる事業也、之に依つて頭腦の文學的生産力を豐富ならしむるの糧食也、藥餌也、旅中の態度は、謹粛にして誠實に、五官に觸るゝ物に對しては、極めて熱心に應接すべし。

其六　旅行と美術家

これも文學者の心得と異る所無し、否、文學者の心得と異る所無き上に、尙ほ一つ重要ある事あり、到る所の神社佛閣、其他古物店、古器物古書畫所藏家等に就き、美術品を探りて鑑賞し研究すべき也。

其七　旅行と教育家

旅行中品行に注意し、言動を慎むべきは言を俟たず、教育視察以外の目的を有せる旅行に於ても、時間に餘裕さへあらば、至る所の地方の教育機關を窺ひ、其得失を研究すべき也、又、教育上の參考品を得て土産となすの心掛けあるべし。

其八　旅行と職工勞働者

職工、勞働者等の旅行は、業を求めて甲地より乙地に移る場合か、左無くば、連中を催して神佛に參詣をなす場合也、業を求むるの旅行は、旅行の種類に就ての心得に説きたる部分を參酌して、然るべく取捨すべし、なほ、職工ならば、何が無くとても其職業用の器具を手離さゞること、古への武士の佩刀に於けるが如くなるべく、勞働者ならば、何時にても、其儘のいてたち

にて、若しくは上衣一枚脱ぎ棄つれば直ちに手に唾して仕事に取掛らるゝやう、身輕に勞働者的武裝をなして途に上るべき也、扨て、連中を催して神佛に參詣をなす旅行に於ては、特に注意すべき事あり、一體職工勞働者などは、此の如き遊樂的旅行をなすこと稀なるものなれば、羽目を外して生命の洗濯をなす氣になり、駄洒落惡洒落に惡戯を混じて、狂態醜態至らざる無く、路上及び滊車電車等の中に於ける他人の迷惑より、宿屋茶屋の災難、他の泊り客の不快不安、是等を犧牲に供して、却つて得色ある者多し、我輩の如き、旅中に於て屢々此徒に遭ひ、厭ふべく賤むべき事となして爪彈さしき、是れ、社會公衆に對する德義上の問題なるのみならず、斯る傍若無人の態度にては、旅中にて間違ひを生じ易し、よく〳〵注意すべし。

其九　旅行と無職業者

無職業者は常に職業を求むる傾きを有す、而も是れ當然の事也、されば、何かの必要ありて旅行すべき時には、新なる天然に接し新なる人間に觸れて、頭腦に種々の刺戟を受くると共に、心機動き開きて、職業を選ぶ事、選びたる職業に有り附く事、有り附きたる職業に最も好き結果あらしむる事等に就き、默會する所あるやう注意力を集中すべき也。

其十　旅行と俳優其他藝人

俳優其他藝人の旅行に就いて先づ區別すべきは

（甲）一都府に定住の俳優其他藝人が、他の都府若くは地方都會と約束して興行に赴く場合

(乙)旅興行を以て主となす俳優其他藝人が、旅より旅を渡り歩く場合の二也、甲の場合に於ては

(一)金離れよく、進物祝儀等は充分に氣張りて、蔭口を利かれぬやうにすべき事

(二)旅中及び先方に到りては、謙遜にして誠實なる態度を取り、假りにも自ら恃んで傲慢なるべからず、又藝人根性の輕薄にして利に赴く丙情を見透さるべからざる事

(三)俳優其他藝人の旅中に於ける一擧一動は盡く廣告なるを記憶し、自己を惡しく廣告せざるやう注意すべき事

等を服膺すべく、又乙の場合には、甲の場合に於ける三つの心得の外に

(一)機智と膽力とを兼ね備へて、機に臨み變に應じ、縱横自在の計策あるべき事

(二)常に快然たる心意を以て、如何なる場合にも笑顏を失はざるべき事

(三)會計を綿密にし、收支の關係を明かにして、出來得る限り餘裕を留め置くべき事

細かき事に渉れば限りなけれど、大體の心得は右にて宜しかるべし。

其十一　旅行と爵位ある人、地位高き人、一般に知られたる人

爵位ある人、地位高き人、一般に知られたる人の旅行は、新聞紙上にも發表せられ、世間もこれに注目し、殊に、其目的地及び沿道の諸人に送迎せら

るゝを常習となせば、頗る其行動を慎まざるべからず、要するに、是等の人の旅中に於ける心得は一切尊大の態度を取らず、洒々落々として城府を設けず人に接する間に、些か親むべくして狎るべからざる謹嚴の點を存し、之を以て全體を締括るべき也、そこの加減がむづかし。

其十二　旅行と男女學生

學生の旅行は、何時にても修學旅行の性質を帶ぶべし、新なる天然、新なる人間、新なる事件に接すると共に、學生として起したる感想を其儘記述し、之を教師或は父兄に示して、批評を乞ふべし、又、學生の旅行は、縱令金錢に不自由無き者にても、極めて質素に、金を費すこと少なくして身を勞すること多きを要す、女學生の旅行には、必ず保護且つ監督の附添人あるべし。

其十三　旅行と壯健なる人

壯健なる人は、旅行するに當つて兩面の心得あるべし。

(一)其壯健を利用して、困難を凌ぎ勞苦を避けざるべき事

(二)其壯健を加ふべし、疾く歩み、快く食ひ、深く清氣を吸ひ、高く山海に嘯くべき事

要するに、壯健を利用して豪壯快活なる旅行をなすと共に、之を以て其壯健を助長するの方法に供する也、壯健なる人に對して旅行は無上の良藥也、而も、其効驗の現著なること、虚弱なる人及び病者に於けるのそれに十倍す

其十四　旅行と虚弱なる人

虚弱なる人は、最も旅行を以て强健法に供するの必要あり、而も、過度の

運動の虚弱なる人に不利なるが如く、過度の旅行も亦宜しからざる也、興に乗じて險山窮谷を歩き過すべからず、船や車に乗り過ぐべからず、漫りに飲食すべからず、平生家内に安居する習慣の者が、俄に旅行の第一日に路程を貪るべからず、良薬たる旅行を以て、害毒の結果を得るの用に供すべからざる也。

其十五　旅行と剛毅なる人

剛毅なる人には別段の注意を要せず、たゞ、旅行に依つて、本來の剛毅に加ふるに多少の洒脱を以てするの練習を取るべきのみ。

其十六　旅行と怯懦なる人

怯懦なる人は、旅行に依つて幾分か其弊を免がるゝを得べし、怯懦なる人

は殊に失策を恐るゝものなれば、失策のあり勝なる旅行を危險に思ふこと殊に甚だし、されば、旅の耻は掻き棄てと云ふ諺は、怯懦なる人に於てのみ之を服膺することを許すべし、大概に多寡を括つて、どうなつたつて生命に拘はることはあるまいと膽を据え、何でもやつて見るが好し、亦、やらねばならぬ羽目となることもあるべし、此羽目になるのが一番の良薬也。

其十七、旅行と冷静なる人

冷静なる人は、旅中に失策すること少なかるべけれど、其代りには、旅行の趣味を充分に嘗め得ざる場合多かるべし、故に、此種の人は、旅行を以て一盃の酒に充て、己れより景氣を附けて萬事に當るが好し、或程度迄故らに誘惑に乗せられて見るも悪しからず、少々ばかりの失策は求めても爲すべし

其十八　旅行と多感なる人

多感なる人の旅行に於ける心得は、冷靜なる人と全く反對なるが好し、左無きだに、旅行には新なる事物の刺戟を受けて感情を激動し易きものなれば、平生多感の人は、これが爲に適度の調子を失つて、旅中に災難を招き、不幸に陷ること無きにあらず、深く注意して冷靜ならんことを勉めば、それにて中庸を得るに庶幾からん。

其十九　旅行と喜べる時

何人にても、喜びある時には氣も浮き立ちて、家に在りても尙ほ旅に出て〻名所舊跡を見物しつゝあるが如き氣になるもの也、況んや其上にて旅行するに於てをや、故に、斯る場合に於ては、餘りに興に乘ずるに失して足許が

見えず引つくりかへる等の如きこと無きやうに注意すべし。

其二十　旅行と悲める時

悲みある時の旅行は殊に大事也、これには二つの場合あり。

(一)悲みありて、旅行を欲せざれども、已むを得ざる必要の爲めに旅行する場合

(二)悲みありて如何ともすること能はず、これを忘れんが爲めに旅行する場合

是れ也、而して二者共に深く注意を要す、悲み憂へて對すれば、山光水色共に暗慘の色を呈し、旅館の燈火、氣笛の聲、共に斷腸の媒ならざるは無し、多くの場合に於て、旅行は却つて悲める者の悲みを加ふる也、其極或

は、華嚴瀑となり耶馬溪とならざるを保せざる也、故に、悲みある時は成るべく悲みを忘るゝ爲めの旅行を試むべからず、若し已むを得ざる必要の爲めに旅行する時あらば、其用件の他を思はず、全心を之に集中するやうに力むべし。

其廿一　旅行と得意なる時、失意なる時、安樂なる時、不安なる時

得意なる時、安樂なる時の旅行は、なほ喜べる時の旅行に同じく、失意なる時、不安なる時の旅行は、略ぼ悲める時の旅行と齊し、但だ、喜べる時、悲める時と云ふが如く、眼前一時の心的作用の昂低にあらざれば、それの如く、急激に極端なる結果を生ずることは無かるべきも、注意して惡結果を免

るべき必要は、充分にあり。

◎同伴の種類に就ての心得

其一　同伴の身分地位

己れより身分貴き者、地位高き者を、旅行の同伴となしたる場合に於ては、易きを之に讓りて己れ難きを取り、逸を彼に與へて自ら勞に服する覺悟あるべし、己れより身分賤き者、地位低き者を同伴となしたる場合ならば、之を同等に待遇して、難も易も逸も勞も、等分に分擔せんことを要すべし。

其二　同伴の親疎生熟

近親血族の者、友人知己の熟懇なる者などと相伴うて旅行する場合には、

たゞ、心易立てが過ぎて我儘を募らせ、それが爲に衝突を起して不愉快を求むる等の事無きやう注意して、相共に加減を取るべきこと肝要也、又、一面識ありて深く相識らざる人、若くは全く生面未知の人と同伴する場合に於ては、特に定められたる事の外、己と彼との有形的及び無形的負擔を公平にし、旅中の諸問題は、協議の上に決行すべき也。

其三　同伴の貧富美醜

己れより富みたる者と同伴する場合に於ては、彼が特に強ゐたる事の外、すべての費用を平等に負擔するの覺悟あるべく、又、彼をして我が分擔し得る額以上に昇るべき出費を敢てせしめざるやう、注意すべし、己れより貧しき者と同伴する場合に於ては、すべての費用を、彼が其半額を分擔し得べき

程度にとゞめ、而も、時々特に宣言して己れより特別の出金をなすべし、勿論此際には、特に出金したりてふ事實を顯著ならしめず、曖昧模糊の間に其ページを操り去らんことを要する也、又、己れより容貌美なる者と同伴して、茶屋宿屋の女中其他旅中にて出會する婦人に、彼の我より氣受好き時に於ても、決して惡感を懷くこと無く、洒々落々として之を面白き事に思ひ打興ずべく、彼をして、我が胸襟の潔よきに敬服し、漫りに誇負するの耻づべきを覺えしむべし、これに反して、同伴者甚だ醜惡に、我が容貌比較的彼に優れるが故に、至る所我の持てること彼を凌ぐ時には、己れ毫も之を悟らざるが如き態度を取り、之を誇負することは勿論、絶對にかゝる問題を念頭に置かざるを示し、而も渾然として斧鑿の痕無からしむべし、痕あれば氣障也。

其四　同伴の人物品性

同伴者の人物偉大にして、其品性高潔なる場合には、旅行の種類の何たるを問はずして、偏に、師父に隨つて精神修養の勤行をなしつゝあるが如く心得べし、弟子となり、臣僕となりて之に奉じ、行住坐臥の間に其薫陶を受くべく專一なるべし、若しそれ、同伴者の人物卑小にして、其品性下劣なるあらんか、之を感化して多少我に同からしめ、且つ之と衝突せずして旅行を圓滿に了へんこと、ナカ〳〵の難事業也、殊に、此の如き人物は、旅中に於て最も其眞相を露呈し、劣を極め陋を極めずんば已まざるものなれば、之と相伴うて旅行すること、愈々以て災難也、ならう事なら、斯る人物と同伴することを避くるを好しとすれど、餘儀無き場合には、力めて彼を我が高き趣味

に引き寄せ、殘る所は、表面だけ彼に同じて、成るべく其感情を害せぬやうになし、兎も角も旅行を無事に了ふべし。

其五　同伴の性癖嗜好

同伴者の性癖嗜好が自己のそれとシックリ合うた時には、これ程旅行に興味多きは無けれど、それが互に矛盾牴觸し、若くは全く正反對ならんか、旅行は全く滅茶々々なるべし、或は、酒の上にて亂暴するが如き惡き癖ある者、至る所にて、飯盛、地獄の如き下等なる賣笑婦に戯れざれば堪能せぬ賤き嗜みある者などと同伴したる場合は、其災難殊に甚だしき也、故に、よく〳〵人物を知り、其平生を明かにしてより、同伴者を選ぶべきなれど、若し打惡くして、性癖嗜好の異りたる者、或は惡き癖、賤き嗜みを有する者と同伴せ

んか、感情を害せざる程度に於て、談笑の間に彼を矯正し、出來得るだけ我が趣味に吸引すると共に、半ば批評家的態度を取りて、彼の性癖嗜好の發動を笑覽するの雅量に依るべき也。

其六　同伴の年齢性別

己れと似寄りたる年齢の者は、旅行の同伴者として最も好し、いたく年老ひたる人と共にするも妙ならず、又、十も二十も齢少なき人を伴ふも面白からぬもの也、されど、若しいたく年老ひたる人と同伴せざるを得ざる場合には、成るべく己れを空しうして彼の宜しきを宜しとし、到底抵ぐべからざる事だけは、柔かに主張して之に叮嚀なる説明を加へ、彼の讓歩を求むべし、要するに、己れと時代の異れる老人てふ者の旅中に於ける言行を觀察して興

味となすてふ雅量あらば、此旅行の圓滑に了るべきこと受合也、これと同じく、著しく齢少き者と共に旅行する場合に於ても、己れより時代新なる人間を研究玩味するの態度を取らば、大抵の事は笑つて彼に任じ、矛盾牴觸の隨分角立ちたるものにても、容易く掌にて圓めることを得べき也、なほ、己れ男にして女と同伴する際に於ては、保護者兼指導者として、彼の意思を其儘こちらの大きな容器の中に入れて自由に持つて歩き、彼をして自ら行くを覺えて容器の中に在りて行くを意識せざらしむべし、次に、己れ女にして男と同伴する時に於ては、大體彼の定めたる順序方法に依りて、彼の指導に隨ひ行動し、大なる不利と過誤とを發見したる場合の外は、決して之に背くべからず、但し此他の細事に於ては、男子をして自己の意思の如く行動せしめて

得々たるの無邪氣を許すも妨げ無し。

◎旅行の方法に就ての心得

其一　日限に依つて里程の日割をなすべき事

旅行と里程との關係は、最初の問題にして且つ最終の問題也、旅行に於ける最も重要の問題はこれ也、故に、旅行に於ては、先づ第一に之を講ぜざるべからず、且つ之を講ずるに熟せざるべからず。

今日に於て、旅行と里程との關係は甚だ多端也。

其兩極端を擧ぐれば

滊車の便最も多き要地と要地との間に於ては、數百里の長程も纔に一日一

夜にして通過すべく、滊車の便は扨て置き、人力車も通はざる僻地にては、十里の路も一日にて行き盡されぬことあるべし

されば、これより旅行せんとするに臨みては、里程と日割との關係に就て、緻密なる豫算無かるべからず。

(一)滊車のみの旅行　發着時間定まりたるものなれば、往復及び先方の滯在に費やす時間、途中下車の時間、用件を了へてより遊覽などに費やす時間等を精算して、細密に日割時間割をなすことを得べし、而して、滊車の事故、線路の故障等の無き限りは、總計の結果に於て、豫定と一分一厘も差異無からしむること容易也、但し、此場合に於て、滊車の乗後れありては滅茶々々也、深く注意すべし。

（二）汽車に依らざる旅行

歩行せねばならぬか、汽車の便無き地方を旅行する時には、全くるべきか、全く馬背に依るべきか、全く人力車に依るべきか、全く乘合馬車に依取すべきか、歩行と乘合馬車、歩行と馬背等を結び着くべきか、爾らざれば、歩行と人力車と馬車と馬背とすべてを取るを可とすべきか等、最初に豫定して、それより日割時間割を定むべし、勿論、斯くしての豫定は、實地に臨みてより、其儘に行ひ難き障害に逢ひ、左無くとも、自己の都合上若くは其時の氣の向き方にて、多少の變更を來すことあるべきも、注意して成るべく豫定と著るしき齟齬無ならしめんことを要す。

（三）汽車旅行と汽車に依らざる旅行との連結　詰まり、（一）と（二）とを種々に連結する旅行也、チョット思へば、其複雜なるだけ、日割時間割を豫定すること、甚だ困難なるが如しと雖も、一方の汽車旅行は發着時間明確なれば、其前後若くは中間に連結する汽車以外の旅行さへ都合好く行かば、左迄むづかしくあらざるべし、唯だ其連結の仕方に注意し、時間の豫算に多少の餘裕を存し置くが肝要也

（四）水上の旅行及びそれと陸上の旅行との接續　海、湖、河等を、汽船、小汽船、帆船、其他の機關にて旅行する場合、及び、其前後及び中間に陸上の旅行を接續する場合は、日割時間割をなすこと最も難し、汽船は發着の時刻定まるものなれど、風浪等の爲にて後

る丶場合もあり、湖或は河の小流船に至つては、公表したる時刻さへ當てにならぬが多く、其上途中立寄る所多く、之に費さる丶時間は、其日々々に異れば、乘り出してより先の事は、確實に豫知すること能はざる也、此時間の定限力薄弱なる旅行に接續するに、陸上の旅行を以てするに至れば、日割時間割の豫定の困難、益々甚だしからざるべからず、されば、此際に於ては、大體定まりたる發着時刻を標準として、多少餘裕を存しての日割時間割を定むべき也。

其二　其日々々の里程を朝晝晩に割る事

これは滊車に依らざる旅行、寧ろ歩行を主として他の旅行機關を之に補足

する場合の旅行也。

たとへば、第一日には八里を行くべしとする時には、午前に五里を行きて午後に三里、第二日に十里を行くべしとするには、午前に六里午後に四里の割にて、午前の鋭氣ある中に半ば以上を行き、午後には三分の一若くは五分の二を行きて、早く宿に着くを、旅行の常の心得となす也。

又、夏日炎暑の候の旅行にて、一日に十里平均を行くべしと定めたらば、日未だ出てざる早天に出發して、午前中に七八里を行き、涼しき茶屋若くは宿屋にてゆる〳〵と畫飯をしたゝめ、それより、晝寢をなし、或は腹這ひて悠々と鞄の書籍を繙き、旅日記其他何かを書きなどし、日影出來て涼風の吹き始むる頃より、立ち出て丶殘れる二三里を行き盡くすべし。

兎に角、朝成るべく早く出て、空氣の清爽に、體力の充實せる間に、一日の里程の三分の二以上を行く心掛けが必要也。

其三　前途の地理に隨つて一日の路程を定むる事

前途に山ありや、川ありや、湖沼ありや、其山は高さや、低さや、險しさや、險しからざるや、山路は長さや、短さや、其川は幅廣さや、狹さや、深きや、淺きや、流れ駛きや、將た緩きや、其湖沼は、舟を傭うて渡るを利とすべきや、其岸を迂回するが宜しかるべきや等を探求して、時を費すことの多少と、身を勞することの輕重とを豫測し、而して後一日の里程を定むるを好しとす。

假りに、五十里の路を、一日十里平均にて五日間に行くべしと定めても、

路の險夷に依りて、或る一日を七八里に減じ、或る一日を十二三里に增すの塲合あるべし。

其四　滊車旅行の心得

滊車旅行の心得を擧げ示さん。

(一)必ず發車時間より少しく前に行き、切符を買ひ、改札口を通過し、車室に入るに、慌てず騷がざるの餘裕を存するを要す、出掛けに慌つれば、其日一日の旅行に慌てが附き纏ひて、動もすれば大なる失策を生ずるもの也、注意すべし。

(二)預け入るゝ手荷物の外、自身携帶して車室内に入る物品は、成るべく一つに纏め、二つ三つに分けて持たざるを好しとす、必ず分くべ

き物は、己れの坐席定まりてより適宜に取り分くべし。

(三)坐席は、乘客の込み合はぬ時にても、漫りに廣く取るべからず、込み合ふ時は勿論也、小やかなる手鞄、信玄袋等の外は、必ず頭の上の網棚若くは腰掛の下に置きて、他人の邪魔にならぬやうにすべし、

(四)濫りに滊車の窓より首を出し、又、唾を吐きなどなすべからず、切符を帽子に挿むなどのハイカラな眞似は宜しからず、金と共に紙入に收め、深く内懐に藏すべし、但し、降車より一停車場前にて取出し、手に握るか、洋服ならばポッケットに入れ置くを好しとす。

(五)食物などを、ゴテ〳〵携へて滊車に乘るは、旅行の趣味を知らざる者也、第一には邪魔になると云ふ弊あり、第二には、沿道至る所の

停車場にて賣る辨當其他の食品を買ふの輕便と興味とを逸し、土地々々の風味を嘗むるの經驗を積むべき機會を默過する損失あり、食物に依りて土地々々の趣味氣質を研究することを思はず、漫りに其味ひの精粗を論じて得々たり、分らず屋にあらずや。

其五、滊船旅行の心得

滊船にて旅行する時の心得に二種あり、一は船暈を避くる心得、他の一は大時化若くは難破に遭ひたる時の心得是也。

船暈は非常に苦しきもの也、甚だしきは、之に堪ふること能はずして、いつそ一思ひに死せんことを希ふに至る、其代り、船暈さへ無ければ、滊船の旅行の愉快なること、物の譬ふべき無し、故に、船暈を避くるの方法を講

ずる也。

船暈を避くるの方法として、昔より云ひ傳へられたる事多し、或は曰く、呼吸を長くして船の一上一下と伴はしむべし、或は曰く、眼を船中及び船の附近に注がずして、遠く天と水と、相連なる邊に放つべし、或は曰く、物を食うて後直ちに船に乗らず、暫く時を閲して半ば消化したる後にすべし、或は曰く、船に乗る時に陸の土を少々紙に包み臍の上に當て置けば、決して醉ふこと無し、或は曰く、硫黄を紙に包み懐中すべし、或は曰く、強き醋を一口飲むべし、又は梅干を含むべし、又は生大根の搾り汁を呑むべしなど、其他なほ種々ありと雖も、これに一々呪ひの如き効驗あるものと思ふは誤り也、要するに

(一)胃の腑の健全なる
(二)腦の病的ならざる
(三)精神の強固なる

此三つが船に醉はざる資格なれば、先づ第一に胃の腑を強くし、次に腦病の痕を絶ち、第三には精神に豪快の氣ありて狂瀾怒濤に興味を感ずるやう修養するを要す、而して、船中は盛に喰ひ、快く語り、元氣好く飛び廻るべく、すべて、消極的に船暈を恐れ避るが如き心を念頭より去り、船暈などゝ云ふ問題を眼中に置かずして、只管船の旅行を樂む心に傾き、愉快に活潑なるべし、極端に云へば、船暈を避くるの法を講ずるは却つて船暈に陥るの道也

藥劑は、胃の腑の消化力を助くる物を食後に服用するくらゐに止むべし、

寶丹、清心丹等の如く、刺戟性ある香ひ高き藥は、却つて嘔氣を催さしむるものなれば、決して此場合に用ふべからず。

一個の人にても、或時は非常の時化に醉はず、又或時はいさゝかの搖れにゲロ〳〵やる等の事あり、船員にて水上の生活に馴れたる者の外、必ず船に醉はずときまりたる人は無し、醉ふも醉はざるも其時の身躰の具合也、胃の腑が健全なる上、水を見て恐れずんば、決して船に醉ふこと無し、胃の腑が病的なる上、心弱くして水を恐れば、如何なる方法を講ずるも効無く、受合つて屹度醉ふべし。

扨て大時化若くは難破の時の心得は、

(一)船長其他船員の指揮に隨つて行動し、狼狽して勝手に動き騒ぐべか

らず。

(二)紙幣其他重量無き大切なる品を肌に着けて、出來得る限り身輕に出立ち、荷物所持品は、一括にして適當の場所に置くべし。

(三)船沈みさうにても、漫りに自分より飛び込むべからず、着衣の外一物も身に帶ばざる輕裝、若しくは夏ならば頓鼻褌腹卷だけにて、有合ふ扉、板の類を小脇に抱へ、愈々水の身に及びたる時、徐に浮ぶやうにすべし。

(四)避難の用意は、親子兄弟にても別々にすべし。

(五)愈々本船危くして端艇に乘り移る時には、船長及び船員の指揮に隨ひて順序を逐ふべく、決して先を爭うて慌て騒ぐべからず、其爲め

端艇の顚覆することあり、殊に、人を排して躍り込むなどは宜しからず。

(六)端艇の中にては、我を忘れて立つたり居たり踉けたりすべからず、身を低くゝ背を平たくして、船底に坐るべし、爾らざれば端艇は顚覆すべし。

其六　電車旅行の心得

東京と京都大阪との間に電車の開通を見る迄は、特に電車旅行の心得を說く程の必要無かるべきが如しと雖も、小さくして見れば、東京神奈川間、國府津湯本間、及び多摩川電氣等の如く、電車を以て旅行機關に供しつゝある部分無きにあらず、これも多少問題になる也。

電車旅行の心得は汽車旅行のそれと略相同じ、但だ、今日の所、何れも十里に足らぬ短距離のみなれば、市內電車に對するが如き手輕き心得にて乘り、其旅行たるを忘れて呑氣に構ふる者多きを見る、種々の手ぬかり、失策は、これより生ずる也、此點に留意するを要す。

其七　馬車旅行の心得

自分だけの馬車を特別に仕立てゝ旅行することなどは、先づ例少なければ、こゝにては、旅行機關として設備せられたる乘合馬車に就ての心得を述ぶるに止めん。(鐵道馬車をも此中に合む)

(一)地方に依りては、鐵道馬車或は乘合馬車の發着時刻を定め置き乍ら、定員若くは定員に近き乘客を得ざれば出發せざるあり、故に、「今山

ますよ」と云ふ呼び聲にのみ依賴せず、果して規定の時刻に出づるや、將た、時刻來りても定員に充たざれば出だざるやを確め、其他不都合の有無を取調べてより乘るべし、迂濶に乘りては一二時間の損をすること無きにあらず。

(二)乘合馬車は極めて窮屈にして、且つ猥雜なるもの也、男女老少互に膝を交へ脇腹を接して、身動きもならぬ上、動搖甚だしく、高低波を打つものなれば、乘客は人間の和へ物の如くなるを免れず、其代り、知らぬ者同志親しく言葉をかはして、談笑の間に山野村驛を馳せ過ぐるの愉快は、他の諸種の旅行機關の企て及ぶ所にあらずと雖も、卑穢下劣なる無敎育の動物ありて、聞くに忍びざる言語を弄す

ることも、此乘合馬車の如く甚だしきは無し、されど、これに處するに他の方法無ければ、苦々しげなる顏色を現はさず、好き加減にあしらひて、外の景色などに心を移し、齒牙に掛けざるを好しとすべし。

(三)途中所々にて小休みする時、馬車の中に居て好きこともあれば、降りて茶を呑まねばならぬこともあるべし、又、錢を取るに抜目無く、馬車の中に居ても澁茶の一盃ぐらゐは持つて來る也、かゝる場合の用意に、一錢二錢の銅貨を切らすべからず。

其八　自轉車旅行の心得

自轉車にて、全國或は何れかの方面を旅行するは、頗る愉快なる事也、こ

れに就いての心得を擧げん。

(一)自轉車に附屬したる要具と、自轉車に結び着けらるゝ雨具と、ポツケットに收めらるゝ物品の外、何をも携帶すべからず、自己の技倆に誇つて之に背かば、途中にて後悔することあるべし。

(二)先の見通さるゝ坦路の外、決して疾行すべからず、長途數日程の旅行に於ては、先の見通さるゝ坦路と雖も、輿に乘じて疾行することを慎むが好し。

(三)石高き惡路、登り路降り路は勾配緩くとも、砂利路は中に一筋固まりたる所ありとも、必ず自轉車を降りて歩むべし、知らぬ土地の旅行に於ては、危險を恐るゝこと臆病者の如く、自轉車を愛護する

こと、古名將の愛馬に於けるが如くなるべし。

(四)宿屋に着かば、何より先づ自轉車を點檢して、異狀無きや損傷無きやを確め、いさゝかにても平生に異らば、直ちに手當てをなし、修復を加ふべし、如何に餓ゑ疲れたりとて、決して後に廻すべからず。

(五)宿屋に於ては、自分の監督の出來る所に自轉車を置くべし、宿屋の指定する場所が監督に不便ならば、少々くらゐ衝突しても構はず、自分の都合好き所へ置くを好しとす、有名なる土地の物慣れたる宿屋ならば、任せ置きても差支なけれど、邊卑の土地の宿屋にては、旅行に嬰兒を伴ひたる心にて、己れの身近く置き、人に障らせず保護すべし。

其九　自働車旅行の心得

自働車と云ふもの、日本にては未だ旅行機關と云ふ程に至らざれども、なほ静岡江尻間の二里二十七町に交通機關として採用せられつゝあり、東京にても早晩市の一端に於てガタ馬車を切り捲くらんとす、幾年の後には、亞米利加に於けるそれと同じく、大自働車競走の催さるゝ盛運に向ひ、死人を生ずるが如き景氣を來さん也、隨つて、自働車を用ふる旅行も、中流以上の社會に流行を見ん。

自働車に依りて旅行する場合は、其機關の事に精通して、異狀及び損傷を修覆するに練熟せざるべからず、是れ第一の要事也、なほ、僻地の村落及び其附近を通過する場合は、成るべく徐行して人馬を驚かすべからず、不測の

變事を生ずること無きにあらざれば也、今日に於ては、是れ以上に注意を與ふべき細目を列すること能はず。

其十　人力車旅行の心得

滊車の便無き地方を旅行する場合には、人力車が重に依賴すべき機關也、之に就て注意すべきこと頗る多し。

先づ人力車を雇ふ時の心得を述べん。

（一）自ら車夫と交渉する時　先づ何地より何地迄の里程幾何にして、其人力車賃何程の相場なるかを、掛茶屋、草鞋賣る店、菓子賣る店、其他淳朴さうなる土地の人に聞き、若くは其朝宿屋を出立する時に大體を聞き置き、之を參考として、明晰に周到に、キビ〳〵と談じ

て定むるを要す。

(二)他人に交渉せしむる時　飲食店、腰掛茶屋等に命じ、若くは宿屋をして車夫と交渉せしむる時には、先づ賃錢の額の大體を聞き置き、次には、よく〳〵念を押して、壯健に、正直に、親切なる車夫を選ぶやうに賴むべし。

(三)途中にて車夫に勸められたる時　如何に勞れ果てたる時にても、足の痛む時にても、車夫の網を張りたる所を通り過る間は、力めて勇氣の凛然たるを示し、車に乘るより歩いた方が早からうと云ふやうな色を見すべし、前より迎へられ、後より追ひ縋られたる時も亦同じ、車夫に草臥れたる弱味を見らるるは、獨り賃錢上のみならず、

すべての點に於て不利也。

次に、人力車に乘りてよりの心得を述べん。

(一)人力車と草鞋との關係　始めに徒歩して、後に人力車に乘り、それより直ちに宿屋に着くべき時には、草鞋を脫ぎ棄つべし、其草鞋若し未だ破れずば蹴込の中に置くべし、又、始め人力車に乘りて、後に徒歩すべき時には、新しき草鞋を確と穿きてより車に上るべし、此二つの場合は決して此敎へに背くべからず。

(二)乘客と車夫との關係　車夫を御するはなほ馬を御するが如し、車上に居睡りし、或は無言にて、車夫が話し掛けても碌に挨拶もせぬなどは、旅行の趣味を解せざるの甚だしきもの也、よく話し、面白

駄馬は、主として人力車の交通頻繁なる能はざる地に、旅行機關として備用せらるゝものにして、今日にても、山坂多き所、僻阪の地などに多く之を見る、なほ今後も、漸次に減じ盡くす迄には數代の年月を要すべし、而して、これには、荷物鞍の上に蒲團或は毛布を敷いて窮屈に跨り、鞍の山形に手拭を通して之を手綱の代りに身を支ふるか、又は、今も信州の山越えなどに用ひらるゝ「荒神」と云ふものに依り、火燵を逆さにしたやうなる物を二つ、鞍の左右に結び着け、旅客二人其一つづゝに入り、悠然安坐、鞍を隔てゝ談笑しつゝ旅行するかの二つあり、何れも舊時代の趣味ありて面白し。

駄馬旅行に就ての心得を左に列記せん。

(一)交渉の方法は、人力車の部を參酌して、宜しきに隨ふべし。

(二)駄馬は、平生馬に乘り馴れぬ者にても差支へ無し、乘降には傍に臺を置かしめても好し、一定の調子にて緩々と歩みを運ぶ故、鞍の上に耐えられぬと云ふこと無し。

(三)駄馬は物に驚き易きものなれば、其心得あるべし、若し驚き跳ね出したる時には、慌てゝ飛び降るべからず、此時鞍の兩側に着けたる荷物あらば、それに取り附き居り、荷物傾きて地に着かんとする頃を見合せ、降り立つべし、又、荷物無き時は、確と鞍に取り附くべし。

(四)三四月頃田舍馬に乘る時は、別して乘降に注意すべし、田舍馬とは、旅行機關に用ひ馴らされたるものならで、臨時に徵發するそれを云

く話して、車夫の語る所より土地の人情風俗を研究するの材料を選擇し、兼て車夫をして倦怠と疲勞とを忘れしめ、好意を生ぜしむべし、其結果は客と車夫との兩得也。

(三)途中車より降るを可とする場合　山坂の登り路、極めて急なる陸り路、砂利を厚く敷いたばかりの路等は、車を下つて徒歩するを好しとす、是れ獨り車夫の勞を省くが爲めなるのみならず、斯る場合車上に在るの窮屈と心苦しさとを免れ、且つ路を早く行き、加之山坂に於て動もすれば陷るの危難を免るべし。

其十一　騎馬旅行の心得

騎馬旅行は二種あり。

(甲)乘馬に乘りての旅行

(乙)馱馬に乘りての旅行

是也、乘馬に乘りての旅行は、始めより己れの馬に乘りて出づるなれば、馬の手入、世話、秣の當てがひ、其携帶、宿に着いてよりの馬の處置等、甚だ面倒也、殊に、今日の日本に於ては、よく〳〵の酔興か、將た何か特別の場合にあらざれば、手飼の乘馬に跨つて、數日乃至十數日の旅行をなすてふことあらざるべし、左れば、(甲)の場合には、必ず其人にそれだけの心得と設備とあるべきものと見て差支へなかるべく、隨つて特に與ふべき注意の個條も無けれど、(乙)の場合は、旅中に於て出ッくはす事なれば、何人と雖も之に遭遇せざるを保せず、注意の必要ある所以也。

駄馬は、主として人力車の交通頻繁なる能はざる地に、旅行機關として備用せらるゝものにして、今日にても、山坂多き所、僻陬の地などに多く之を見る、なほ今後も、漸次に減じ盡くす迄には數代の年月を要すべし、而して、これには、荷物鞍の上に蒲團或は毛布を敷いて窮屈に跨り、鞍の山形に手拭を通して之を手綱の代りに身を支ふるか、又は、今も信州の山越えなどに用ひらるゝ「荒神」と云ふものに依り、火燵を逆さにしたやうなる物を二つ、鞍の左右に結び着け、旅客二人其一つづゝに入り、悠然安坐、鞍を隔てゝ談笑しつゝ旅行するかの二つあり、何れも舊時代の趣味ありて面白し。

駄馬旅行に就ての心得を左に列記せん。

(一)交渉の方法は、人力車の部を參酌して、宜しきに隨ふべし。

(二)駄馬は、平生馬に乘り馴れぬ者にても差支へ無し、乘降には傍に臺を置かしめても好し、一定の調子にて緩々と歩みを運ぶ故、鞍の上に耐えられぬと云ふこと無し。

(三)駄馬は物に驚き易きものなれば、其心得あるべし、若し驚き跳ね出したる時には、慌てゝ飛び降るべからず、此時鞍の兩側に着けたる荷物あらば、それに取り附き居り、荷物傾きて地に着かんとする頃を見合せ、降り立つべし、又、荷物無き時は、確と鞍に取り附くべし。

(四)三四月頃田舍馬に乘る時は、別して乘降に注意すべし、田舍馬とは、旅行機關に用ひ馴らされたるものならで、臨時に徵發するそれを云

ふ、これらは、休め置きて時々使ふものなる故、春陽の氣に乘じて突然驅け出すことあり、其心得あるべし。

(五)夏の旅行には、馬に虻着きて血を吸ふ故、動もすれば跳ね上がる也、注意してかゝる塲合落されぬやうすべし。

(六)駄馬に乘りたる時には、深く居睡りせぬやう注意すべし、朝早く出立し、若くは前夜寢苦しかりし時などは、程好く鞍の上に搖られて、コクリ〳〵と來るもの也、麗かなる春の日、夏の暑き盡には、殊に其傾き多し、山坂、川端、崖の上、荆棘の藪の側を通る時など、深く注意すべし。

(七)大小便をこらえて馬に乘るべからず、若し落馬せば、之が爲に氣絕

することあるべし。

其十二　滊船以外の船の旅行に於ける心得

滊船以外の船には、石油發動機の船、端艇、帆船、櫓にて漕ぐ船、棹にて漕ぐ船、曳船等あり、俱に皆旅行機關に用ふべし、隨つて其各別の心得を述ぶるの必要あり。

(一)石油發動機船　これは、河或は湖に於ける小蒸氣船と同じ意義のもの也、たゞ、石油臭さと、機關の響の馬鹿に騷々しさとのみが疵なれば、これさへ我慢が出來れば、其他は壘の上に居るも同然にて、別段の心得と云ふもの無し、但し、此二つの缺點を我慢の出來ぬ人は、乘らざるを好しとす。

(二)端艇　端艇の旅行は、殆んどすべての場合に於て冒險也、これに依つて海を航し、甲の港より乙の港に赴くか、離れたる島に赴くか、或る方面の沿岸を一週するか、或は大河の上流を探るか、いづれにしても冒險ならぬは無し、されば、これを、企つる者は、大略左の條々を心得ざるべからざる也。

(1)一時の客氣に乘じて之を企つるは、失敗を求め危險に陷るの道なる事

(2)身體强健、意志鞏固、尤も忍耐力に富みて、百折千挫撓まず、單調に倦まざるべき事

(3)最も操艇の術に長じ、舟を運らすこと臂の指を使ふが如くなる

べき事

(4)深く海水の性を知り波頭波底の事に明かなること我が家室の中に於けるが如く、兼て水練の妙手なるべき事

(5)艇體の良否、堅脆を鑑識するの眼孔と其經驗とを有し、最上なる端艇を選ぶべき事

(6)艇體に、遠航防波の設備を施すの方法を熟知し、且つ之に練熟すべき事

(7)艇體及び附屬品を修繕するの術に長じ、且つ修繕用具を準備すべき事

(8)途中の日割と寄航と食事との手筈、始めに積載する飲食物と、

途中にて積載すべき飲食物との關係、其分量の見積り等に附き精密切實の豫算あるべく、而も、其豫算に少しく分量を加へて實地の準備をなし、萬一の場合に供すべき事

(三)帆船　帆船の旅行は全然舊時代的也、されど、時としは之に依らざるを得ざる必要あることもあるべく、亦故に之を試むるも一興なるべし、其心得は古來定まりたる數あり。

(1)先づ船中の諸道具、板子、竿の類のある所を見定め置くべし、大風雨等にて船覆らんとする時は、其中一つを追取り、水中に入るの覺悟すべき也。

(2)海上にて大魚の類船へ附纏ふことあり、其時驚き騷がずして、

船中の人盡く影をかくし、板、金、其他音高き物を打ち鳴らすべし、其魚大抵逃げ去らん也。

(3)船の傍にて龍卷あれば、俄に黑雲舞ひ下がりて海に粘し、波濤湧き立ちて大渦を捲くもの也、物馴れたる船頭は心得あれど、乘客も亦驚かずして、板子、笘の類を其渦に投げ込み捲かすれば、勢ひ少しく穩になるべし、其間に、一同力を合せて船を乘り拔くこと肝要也。

(4)便船の人數多きは、第一乘合の者相互の迷惑にて、其上船子の働きを妨げ、又異變等を生じ易く、自然船の運用に影響すべし、成るべく乘合の人數少きを取るべし。

(5)帆船には、古來の習慣にて忌み言葉多く、又種々の方式ありて何でも無き不用意の擧動も、痛く船頭の感情を害することあり、一例を擧ぐれば、「引つくりかへる」などゝ云ふ言葉を口にすることは禁物也、其他、船に依り、土地に依り、種々異る忌み言葉と忌み事とあれば、船に乘る時確に聞きて記憶するか、手帳に控へ置くかすべし。

(6)帆船の中にも飲食物あれど、これは氣船の如く充分に設備整ふものにあらざれば、嗜好の食品、飲料、果物等、數種を携帶すべし、これは氣車旅行と全然反對也、食品と共に藥品も必要也。

(四)櫓にて漕ぐ船　櫓にて漕ぐ船の旅行は趣味多し、長江、大湖、内海等の、霧の晨、月の夕には、これ程樂しき旅行あるまじと思ふ、而して、櫓拍子に連れての適度なる動搖は、此旅行を最も愉快ならしむる所以也、此旅行に於ては、特に要すべき心得てふもの無し、だゞ、此旅行の極めて樂しむべきを認むれば足るのみ、其他、食品飲料、樂器、詩歌集、文學書類等を携帶すべきことは、特に此旅行のみの注意にあらず。

(五)棹にて漕ぐ舟　天龍川、富士川、木曾川、保津川等の急流を降る旅行也、或は、遡られるだけ川に遡る旅行也、これも興味に屬する旅行にして、縱令必要の爲めに之に依るの場合にても、いや

〳〵乍ら已むを得ずと云ふにあらずして、傍ら之を興味とするの心得無かるべからず、之に就ての注意を擧ぐれば

(1)綺羅びやかに着飾らず、水に濡れても構はぬ衣服を着るか、左なくば水をハヂく外套を纏ふべし、洋服の輕裝最も好し。

(2)金錢及び貴重品は肌に着け、其他の荷物は、乘客一同の分と共に船中然るべき所に置きても、確と目を着けて、何時にても咄嗟に拔き取らるゝやうにすべし。

(3)大小便は必ず舟に乘る前に濟まし、且つ其日は朝より餘り多く水分を吸收せざるべし。

(4)腰漫りに立つたり居たり身を動かし、又、急灘を下る時驚き騷ぐ

べからず。

(5)股引は手早く捲くり上げらるゝやうに穿き、足袋若くは靴足袋等も、容易く脱ぎ得るものを用ふべし、これは舟が破壞したる時の爲のみならず、動もすれば淺瀨に乘り上ぐることあれば、其時直ちに降り立ちて、船頭と力を合せ、舟を押し出すが爲也。

(6)飲食物は成るべく餘分に携帶すべし、是れ、膝を交ふる同乘者に分ちて、其親密を助ぐる爲め也、奇景異觀の間を奔り下る大河急流の輕舟に於ては、乘客親密になり易きもの也。

(六)曳舟　曳舟に乘りて旅行する場合は、今の時代に於て極めて稀也、

されど、草臥ては荷馬車の端にさへ乗せて貰ふこともある也、曳船に乗りて便宜なる時には曳船に乗るに、何の差支へあらん、而も、此旅行は至極安樂なるものなれば、他の種々の水上旅行に於ける心得を參酌すべきのみにて、其外特に心得とすべきこと無し、但し、此旅行は岸に近き所を通り、幾度も市邑村落の間を過ぐるものなれば、岸を通る者、岸にて物を洗ふ者などゝ冗談口を利き合ひ、果ては喧嘩になりて、汚き物を舟の中へ投げ込まるゝ事など、屢々ある習ひ也、注意すべし。

（駕籠に乗りての旅行、雪車に乗りての旅行に就ての心得は、「旅行の土地に就ての心得」の門に在り）

其十三　衣服の選び方及び其着やう

衣服は旅行と大關係あり、之を選ぶこと肝要也。

先づ身に着くる衣服の事より始めん。

（一）衣服に就ての大體の心得

(1) 柔かにして且つ丈夫なるを好しとす、剛ければ窮屈に、質脆ければ破れ易し。

(2) 旅行の衣服は、洋服にても和服にても黑つぽくして汚れ目の見えぬを好しとす。

(3) 縞柄はあまり地味ならぬが好し、旅中は快活洒脫を尙ぶものなれば、衣服も之に準じて粗大なる縞柄を選ぶべし、但し、いやに派手なるは惡しし。

(二)洋服和服何れが可なるべきは各人の勝手と、其平生の習慣とよりして、己れに都合好きを取るべし、先づ、手輕き背廣服を着くるのが最も宜しきやうなれど、平生洋服を着慣れぬ者には、却つて窮屈を覺えしむべく、和服にても、いくらも輕裝は出來得べし、但し、和服の場合には、成るべく筒袖にすべく、羽織は用意に荷物として携帶するも、途中着て歩かぬ方が好し、これも、汚しても構はぬ羽織を外套代りに着る場合は格別也。

(三)肌に着くる物に就ての心得　最も肌に近き物より、順を逐うて列擧せん。

(1)幞鼻褌　洋服にても和服にても越中が第一也、次は猿股也、

猿股は身にシックリとして好けれど、大小便の時に手數の掛る缺點あり。

(2)肌着　シャツが好し、暑き時は網のシャツ、其他は毛絲にて編みたるが好く、途中にて若しいたく汚れたる時には、容易く洗濯も出來、又打棄つても惜しからず、何所にても直ぐ代りの調へらるゝやうな物を用ふべし、日本の襦袢はさうは行かぬもの也。

(3)胴卷　これは是非用ふべし、腸を保護し、且つ金錢其他貴重の品を收むべきものなれば也、品質は、夏冬共にフランネル製の薄く柔きが好し。

(4)股引脚絆　旅行の種類に依つて、股引なくても差支へなけれど、先づ旅行と名の附く以上は股引を穿くが常の心得也、穿かぬ迄にも携帶すべし、況んや、草鞋を穿いて歩く旅行に於ては、股引は缺くべからざる武裝なるをや其品質は、暑い時に木綿縮、其他はフランネルを取るべし、シックリと腰に合ぶのが無ければ、少しく餘裕あるを取るべし、狹きを無理に穿くは悪しし、なほ、膝の下にて直く扣紐を合はす半股引が一番好きやう也、これは脚の具合殊に好く、端折りたる裾を下せば、常の如く、裾を上げて脚絆を襦に當つれば、百里の山河を蹈破すべき身輕き出立となるべし、又、脚絆には西洋式のグル〳〵と脚へ捲き

着くるもの、日本式にても、上下を紐にて結ぶもの、其他ズック製の物、草を織りたるもの、皆宜しからず、盲目縞の表に淺黄の裏、コハゼを隙間無く合せて、上部を紐にて締ひるものに限る也。

(5)足袋　丈夫なる厚き刺足袋を好しとす、但しこれは草鞋を穿く場合の注意也、其他の場合は注意に及ばず。

(6)手袋　これはあつても無くても好けれど、何を取るべきかと云へば、夏冬共に丈夫にて汚れの浸み込まぬもの、殊に、夏の日は洗ひが利くを尚ぶ。

(四)帶に就ての心得　これは角帶にても兵子帶にても各人の勝手也、

たゞ注意すべきは、丈夫なると、色の變らざるとを取るべき事也。

(五)帽子外套は如何なる物を選ぶべき　帽子は人々の好みあり、且つ似合ふの似合はぬのと云ふ問題もあれば、一概に言ふこと能はざれども、先づ普通に鳥打形を好しとす、これは、風に飛ばされぬと、邪魔になる時小くして懐か鞄かに捻ぢ込み得るとの利あれば也、又、外套は、防寒を主とせずに、輕くして且つ水を彈く性質の物を選ぶべし、厚ぼったくして雨水を吸ひ込むものは宜しからず。

(五)旅裝の仕方　身を引締むる程キチンとしたるは惡しゝ、始めに身體を伸ばし或は屈めて其自由なるや否やを試むべし、最初いさゝかの窮屈にても、旅中日數を重ぬるに隨つて、或は身體に故障を生ず

るの結果とならん、なほ、最も注意すべきは、旅裝を充分に調へて、帽子を頂き外套を着、鞄を肩より脇へ掛けたる儘、草鞋を脱いだり穿いたり、若くは緒を結んだりすることの出來るやうに、身體を自由ならしむべき事也。

其十四　携帶品の選び方及び其持やう

先づ、普通の旅行に重なる携帶品を列擧すれば。

(一)金入れ
(二)懐中時計
(三)懐紙
(四)手拭

(五)鞄

(六)鞄に收むる必要の品々

(七)蝙蝠傘若くはステッキ

等なるべし、各別に就ての選び方及び持ち方を左に述べん。

(一)金入れに就ての心得　これは、胴卷より小出しゝたる金を入れ置く爲の用なれば、洋服なら蝦蟇口、和服なら普通の嚢財布を好しとす、蝦蟇口は見得に拘はらずして、革の厚く、口金の丈夫にして且つ簡單なるを選ぶべく、財布は與一兵衛式の破れにくゝ汚れにくき物に、丈夫の紐を附け、頸に掛くるか帶にからむかして、確と懷に收むべし。

(二)懷中時計に就ての心得　重くとも、不格好なりとも、堅牢にして狂ひの來ぬものを選ぶべし、少々位ゐ物に打着けても、落しても、平氣なるを取るべし、而して、餘計な飾りはいらざれども、必ず磁石を添ふるを要す、旅中方角を見るべき時あるべければ也。

(三)懷紙に就ての心得　半紙一帖を四折にして懷に收めよ、苟くも紙と名の附く物を要する場合ならば、如何なる用にもこれにて足るべし、其他の紙類は、或る一二の用に適するのみにて、他に融通が利かず。

(四)手拭に就ての心得　日本の手拭が好し、ハンケチは不可也、縱令洋服の時にても、ハンケチの外必ず手拭を持つべし。

(五)鞄に就ての心得　紐にし袈裟かけに肩より脇に掛くるなれば、成るべく大からず、成るべく重からぬを選ぶべし、殊に注意すべきは、旅中は頻繁に鞄を開閉する故、口金の丈夫にて其取扱ひの簡易なるものにあらざれば、意外の困難を生ずるあるべきこと也、但し、始より終迄土を踏まぬ旅行ならば、どんな鞄にても勝手に持つべきこと勿論也。

(六)鞄に收むる必要の品々に就ての心得　先づ土を踏まぬ旅行に於ては、鞄の重量を己れの力にさゝへて歩くにあらざれば、成るべく多くの必要品を收むるを可とすべく、それは大略

(1)着換の衣服

(2)豫備の肌着、嚔鼻褌、手拭の類
(3)藥劑數種
(4)齒磨楊子、齒磨粉、石鹼、櫛、ブラシ、香水の類
(5)手帳、鉛筆、書翰用紙、記錄用紙、狀袋、ナイフ(錐附)等の類
(6)郵便切手、賴信紙の類
(7)旅行案內、名所案內の類
(8)愛讀書、紀行文集の類(これらを必要品に算ふるは妥當を缺くが如しと雖も、人に依りては、必要品以上の必要品なるべし)

等なるが、草鞋を穿いて歩く時、肩に掛くる鞄には、さうは入られるものに

あらず、草鞋を穿いて歩く旅行に手ブラにては、所に依つて怪しき奴と睨まるゝやも知れざれば、體裁の爲にも鞄の一つぐらゐは持つが宜しかるべく、既に持つ以上は、相應に物を容るべきなれど、成るべく節減して、羽織一枚かけがへの犢鼻褌一ずゝ、藥劑、齒磨道具、石鹸、櫛、ナイフ、狀袋、卷紙、切手、賴信紙ぐらゐにとゞめ、重きを覺えざる程度を守るを好しとす、尤も、直接身に着けたる物は重きを覺えざれば、手帳、鉛筆、旅行案内、一二の愛讀書等は、洋服ならばポッケット、和服ならば懷、背中、袂などに入るべし。

（七）蝙蝠傘若くはステッキに就ての心得　蝙蝠傘は、日と雨との防ぎに、旅中必ず携帶すべきものなるが、其必要無き場合はステッキに

代用すべく、細巻にして革嚢に入れたるを好しとす、されど、これは高價なるものなれば、何人も爾すべしと云ふにあらず、要するに、丈夫にして雨も漏らず杖にしても壞れぬやうのものならば結構也、又、外套（頭巾附）に雨を防ぐ用意あらば、蝙蝠傘ならでステッキを携ふるも宜しからん

其十五　草鞋の擇び方及び穿き方

草鞋は、土を踏む旅行に於ける第一の必要具也、隨つて、其選び方、其穿き方に種々の心得あり。

（一）最良の草鞋　藁製にて作りたる草鞋は最も良し、柔にして足心地好く、且つ久しきに耐ふ。

(二)第二等の草鞋　これは麻にて製したるもの也、耐久力に於ては樫裾製のに優ると雖も、それに比して少しく固く且つ重さを缺點とす

(三)普通の草鞋　云ふ迄も無く藁製のそれ也、他に良き草鞋ありとも、強いてそれを求むるに及ばず、至る所の市頭村端に吊り下がりつゝある二錢三錢のそれを求めて穿くを可とす、草鞋を鑑識することは、地方に依つて作り方異れば、一概に云ふこと能はずと雖も、厚く固く幅廣くして、緒の太く短きは、具合惡し、薄く、柔く、肌目細かに、細くして格恰好く、緒の細く長きを取るべし。

(四)草鞋の穿き方　これも色々の流宜あり、又、馴れたる者はどう穿いても足に合ふものなれど、旅馴れぬ中は、どう穿いても直きに曲

り、一端は緩みて一端は締まり、其爲め足を嚙まれ、難澁するもの也、故に、先づ厚き刺足袋を穿きたる上、草鞋を平なる所に置きて、踵の當る所を二つ三つ拳にて打ち、それより踵にてトン〳〵と踏み凹め、正しく足を落付けて後、乳に通りたる紐を程よく引締め、前にて交叉して後に廻はし、内へ潜らせ、後に立ちたる柱の外を交叉して廻らせ、各他の一方が潜り入りたる所を潜り拔けて、再び前に合するやうにし、これにて餘り固くなく一結びし、餘れる端は、掌にて二本をキリ〳〵と捻り合はせ、横の方へ、二搦みばかりして挾み置くべし、これが、一番に草鞋の曲らぬ足の痛まぬ穿きやう也。

其他、草鞋は打ち柔げて穿くべきものにて、打つべき槌無き時には、片々づゝ兩手に持ちてハタ〳〵と打ち合はすが好しなどゝいふ、老人の言もあれど、前に述べたる通りに行へば充分也。

其十六　下駄及び靴の選び方と其穿き方

土を踏むの旅行には、草鞋を穿くが第一なれど、人に依つては下駄を勝手とするもあるべく、又、靴を好とするもあらん、故に、草鞋に就いて述べたる後、下駄及び靴の問題に移るは、當然の順序也。

下駄は、太き小倉鼻緒の日和下駄に限る也、これならば、平生草鞋を穿き慣れぬ人には、却つて草鞋より優れるなるべし。

靴は、足に合ひたる革の柔かさが好し、革の剛さ、足に合はざるは、如何

なる場合にてしも惡しゝ、なほ、平生靴を穿き慣れて、靴の方が好きやうに思ひても、旅行は又格別なるものなれば、成るべく之に依らずして、草鞋若くは日和下駄を取るべし。

其十七　路の歩き方

愈々旅行の骨髓たる路の歩き方を說くべし、これには、古來旅行家の敵へ多く、草臥れぬ法、早道の法、路の變化に隨つての足の運び方等、種々あり、左に、出來得べきたけ細密に項目を別ちて解說すべし。

（一）足の運び方　足を強く地に打ち着くるは、歩き下手の徵也、能く歩む者は、夜中に疾く走りて、路傍に眠れる犬を驚かさず、隨つて草鞋の破るゝことも遲し、腰を据え、體を正しくし、小刻みにチョ

こ〳〵と走らず、少し大膀に、柔かく且つ確に土を踏み、緩やかに歩みを進め、全身にまんべんなく力を充たし、特に足にのみ氣を集むべからず。

(二)出始めの歩き方　旅行せんとて我家の門を出てたる時には、漫に氣も勇み立ち、且つは我身が長途の旅行に堪ふるの資格あるを信ぜんとて、無暗に足を早くするもの也、されど是れ初心のやり方にて旅慣れたる者の爲す所にあらず　かゝる輩の草臥てへト〳〵になりたる頃は、旅慣れたる者の足がダン〳〵早くなる時也、何でも始めは、新鮮の活氣を押へて緩々と歩くべし。

(三)草臥たる時の歩き方　旅慣れぬ者、或は慣れても意氣地無き者は

草臥るゝに隨つて足鈍く姿勢崩れ、顏を顰め、息を彈ませ、半死半生の有樣にて、足を曳き〳〵歩くに至る也、之が爲に草臥は益々甚だしくなり、其結果は翌る日にも祟ることあり、心すべし、斯る場合は、眼を睜り、拳を握り、勇奮一番、二三度躍り上がりて、大地をドウ〳〵と踏み鳴らしたる後、神氣を皷舞して、大膀早足に、今迄の二倍の速力を以つて急歩し、目的の所迄は決して氣を抜くべからず、これは却つて苦みを忘れ、且つ翌日の疲勞を忘るゝ方法也。

(四)朝の歩き方　朝はゆる〳〵と歩むべし、ゆる〳〵と歩みても、朝は自然に路が捗取るもの也、且つ、斯くせざれば草臥の來ること早かるべし。

(五)晝の歩き方　晝はダレて來るもの也、晝飯の休みを目當にして其前は、出來得る限り早足に歩み、惰氣を驅逐すべし、すべて、旅中惰氣に負けては、興味も盡き、用件も達されぬもの也。

(六)晩の歩き方　旅行はすべて午前中に其半ば以上出來得るだけ多くを歩み過ぎ、成るべく少き里程を午後に殘すべければ、晝飯後充分の休憩を取りたる上、更に新なる勇氣を喚び起し、急き足にて、其夜の泊りと定めたる所迄一氣に歩き通すべし、但し、日のある中に宿に着く程結構なることは無けれど、時に依りては、愈々泊るべき土地目の前に近づきて、半里か一里と云ふ所より、故に悠々と構へて、夕暮の景色を賞しつゝ、灯ともし頃に宿に入るも好からん。

(七)夜の歩き方　旅行は午前中に多くを歩みて、午後にさへ成るべく少き路程を殘すを尙べば、好んで夜歩くことなどは禁物也、されど、途中に意外の故障あり、又は、名所舊跡を訪ひ、其他研究取調べの材料を得て時を費したる爲、已むを得ずして夜行く時には、柔かく且つ確に足を踏み占めて、早くなく緩くなく、氣を落着けて尋常に歩むべし、勿論、これは夜となりても人の寢ぬ中に宿屋に着かるべき豫定の時也、宿屋に寢て了はるゝ頃れある時には、車に乘るべし、車に乘ること能はずんば、夜中知らぬ路を急歩して過ちを生ずるよりは、寧ろ、寢たる宿屋を無理にも叩き起すを好しとす、但し、夜通しに歩く時には、食物と飲料とを用意し、時々休みて、飲み或は

食ふべし。

(八)平地の歩き方　平地ならば、前に示せし姿勢と足の運び方とを以て、只尋常に歩むべし。

(九)山坂の歩き方　山坂にさしかゝらば、歩き乍ら仰向いて上を望むべからず、氣草臥に草臥れて了ふもの也、たゞ我が足の爪先のみに目を注いで細かく歩まば、峻坂と雖も其勾配の急なるを覺えずして何時しか登り盡すべし、又、降り路は登りよりも多く注意を要す、遙に麓を見下せば一飛びに行かるゝやうにて、實際歩いて見ればさうは無雜作に行かず、曲りくねつて案外に長さを常とす、これも矢張、歩く時には足の爪先にのみ目を着け、大膀に飛び降らず、登る

時よりも更に一層細かく、其代り足の運び早く歩むべし、大膀に飛び降らば、富士の砂走の外は、足を打着くること強くして、腦天迄響き渡り、草臥れ忽ちに至らん。

(十)泥の中の歩き方　一歩一歩足を拔き上げずに、世尊寺流の磨り足にて、辷るやうに行き、引ッ掛る物のある時にのみ拔き上ぐべし、但し、泥の部分を過ぎば、直ちに水にて泥を洗ひ落せ、決して其儘に乾かすべからず、其時最も注意すべきは、足の裏と草鞋の表との間に溜りたる泥を奇麗に洗ひ落す事也。

(十一)砂の上の歩き方　日本にては、正當に路ある所を行きて砂の上を歩く塲合殆んど無しと雖も、時としては捷徑に依りて砂丘を越え

或は、本道を行くよりは、海岸の砂原を行く方が、近くして氣持の好きことあり、かゝる場合の心得を說くこと亦必要ならずとせず、惣じて、砂の上を歩くには、足を置きたる所崩れて、後へ辷り下る傾きあるものなれば、踵を浮かして爪先へ力を入る加減にて歩むべし、又、海岸を行くには、波打際の濡れて固まりたる砂を踏むが好し。

(十二)礫を敷きたる路の歩き方　礫を敷きたる路を心無く行けば、足の裏熱して痛く、果ては堪へ難くなるもの也、足を輕く地の上に置き、なほ眞直に下さずして、少しく向うへ辷らせる氣味あるべし、草鞋破れ易けれど、それには換へ難し。

(十三)眞直なる路の歩き方　眞直に一筋長々と拖かれたるは、道路として申分無けれど、歩いて見て詰らぬもの也、先が見え乍ら遠くして、目先を新にする變化少なければ、身躰より先づ心が倦みて草臥を催すべし、故に、此場合は、時々頭を擧げてあたりを見廻すの外我が前三間ばかりの所にのみ目を注いて、忽ちそれを歩み盡すを樂みとすべし、又、前方一二町の間に障碍物無きを見定めたる時は、腰を据ゑて大膀に後歩みするも好し、時々此後歩みを挾むは面白きもの也。

(十四)曲折多き路の歩き方　曲折多き路は、それに隨つて變化多きものなれど、たまには、先の村若くは町が手に取るやうに近きに、路

は癪に障る程屈折多くして、行けども行けども同じ所にあるが如きことあり、此場合は、先の村若くは町を眼中に置かざると同時に、左なら左と、路の片側の景色にのみ目を注ぐべし、且つ、路の曲り角は、其外側を行けば足數多くなるものなるを以て、内側を行き、足數を少くするを要す。

右の外、路を行くことに關する諸問題は、項を改めて別に說くべし。

其十八　渡船に乘る心得

旅中渡船に乘る場合は、乘り降り共に先を爭ふべからず、荷物は身に引き附けて、肩に掛け背に負ひたる物の外、片手に提げ得るだけの量に止めて、我が脚とスレ〳〵に置くべし。

其十九　捷徑を行く心得

山坂には、よく新道と舊道とあり、舊道は近けれども險しく、新道は平かなれども遠きを常とす、而して、舊道には歷史多く、古き並木、古碑等あり、て、趣味に富めど、新道は概ね單調無趣味也、故に、御嶽新道の如く、奇景の地を經べく特に開かれたるもの、小夜の中山の如く古跡を新道に移したるものなどは格別なれど、其他は必ず舊道に就くを好しとす、尤も、これは徒歩或は馬上の旅行に就てのみの注意にて、新道は車を通ずる爲に開かれたるものなれば、車に乘りての旅行は新道に依るべきこと、常然也。

其他、道として開きたるものにあらざれども、多くの人の足跡が重なりて自然に成りたる捷徑あり、これは歩くに骨の折るゝ代りに、近きこと驚くば